

---

# 魔法少女リリカルなのは ～音速の走り人～

ハイジ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～音速の走り人～

### 【Nコード】

N5014N

### 【作者名】

ハイジ

### 【あらすじ】

走る事が好きな高井 翔一が魔法少女の世界に転移され、最速を夢見る少年に待ち受けるものとは？

走ることを愛する少年、魔法を操る少女が出会うとき、一つの物語が生まれる。誰よりも速く、そして、強く走り（生き）抜け！

## プロローグ（前書き）

どうも、みなさん初めまして。ハイジと申します。

このサイトの小説を色々と見ていて、自分も書いてみようと思いました。

初の二次創作でなのは書くわけですが、「ここはおかしいだろ！」という所が出てくると思います。どうかよろしく願います。

## ブローグ

「はあ」

8月にまだなつばかりで今は昼。暑さは最高潮だった。そのおかげで自分の競技を終えてから時間が経っても体はまだ熱く、冷め切っていなかった。ストレッチが終わった後は芝生広場の片隅にある木々を日陰の中で寝そべっていた。

走ることを始めてたった3ヶ月あまりの自分が初めて味わった全国の舞台。正直何が起きたのか分からなかった。そして、無我夢中で走っていたらすぐに終わった。

「…オレ、インターハイに出ていたんだよな…」

それが実感として現れたのは今頃だった。それと同時に悔しさもこみ上げてきた。監督から渡された結果表を見してみる。

「…くそっ」

1500m 予選第三組

高井 翔一 13位

その組では16人が走り、少年、高井 翔一の順位はとても胸を張れるものではなかった。しかし、走ることを始めて3ヶ月の少年がインターハイに出場。これだけでも十分な物で、高井自身もインターハイというものを楽しもうとした。しかし、実際はそうではなかった。

勝負をさせてくれなかった。

その思いが今の高井にあった。

今回のインターハイは高井が納得出来るものではなかった。しか

し、それを経験としよう一度上のレベルに行くためには必要だということも分かっている。

「…まっ、いつまでも落ち込んでたってしょうがないか。明日からまた練習だな！」そう言っただけで自分を奮い立たせ、ここから元々いた場所に帰ろうと枕代わりになっていたスポーツバッグに肩に掛けようとした。

「なんだこれ？」

バッグを置いてあった場所に小さな石があった。それを拾って見ると、まるで宝石のような物でいわばサファイアのような石だった。誰かの落とし物かと思い、それをポケットに入れようとした時だった。

カッ！

「え？」

突然、石から光が発せられ高井の視界を光が覆う。

それから、この世界から高井 翔一は消えた。

## プロローグ（後書き）

プロローグは無理矢理な上に、なのは関係ありませんでしたorz  
今回は主人公のプロフィールと第一話のセットです。

## キャラ紹介（前書き）

こちらは話に合わせて更新していきます。

## キャラ紹介

高井 翔一

年齢 15歳（高1）

身長 174cm

体重 62kg

所属 県立郭翔高等学校陸上部中距離ブロック

デバイス スピードスパイダー

魔力色 白

イメージCV 櫻井 孝宏

本編の主人公。陸上経験は3ヶ月あまりだが、インターハイに出場した新鋭。後半のスピードのノビとそれを押し通すパワーが持ち味で中距離種目を専門とする。

喜怒哀楽が激しく、時々感情をコントロールが出来なくなる時があるが、基本的には優しく明るい性格。

漫画、ゲーム、特撮物が好きで、特に仮面ライダーが大好きで平成ライダーシリーズはすべて見ている。お気に入りカブト。しかし、それ以上に走ることを愛しており、走ることで得られる何かを追い求めている。

魔導師になりたてなため、まだスタイルを確立させてはいないがフェイトを凌ぐスピードを持っている。また、徒手空拳による打撃、特に蹴り技を多用する。

デバイスのスピードスパイダーには「スパイダー」という愛称で呼んでいる。



## 第一話（前書き）

ようやくスタートです！

では、ごきげん！

## 第一話

高井 翔一は今、置かれている状況を理解しようとするが不可思議な現象を目の当たりにして処理しきれずにいた。そんな彼に今やれることはただ一つ。それは…。

ビュンッ!!

「うおっ！なんなんだよ一体！」

目の前にいる少女の攻撃から避けることのみ！！

自分は確か、インターハイのメイン会場のすぐ近くにある芝生広場でストレッチやレースの一人反省会をして、その後はもともといた場所に帰り、遅めの昼食を食べる。そのはずだった。

目を眩ませるような光が無くなり、ゆっくりと目を開ける。視界に飛び込んできたのはとても信じがたく、不可解な物だった。まず今の自分がある場所は何故かどこかのビルの屋上だった。

こんなところに来た覚えなんか一つもなかった。  
次に今の空の色。ついさっきまでは昼頃だったのに今は真っ黒な空に星が光っていた。

「なんで夜になつてんだ！？というか、ほんとにここ何処！？」

翔一は今自分が置かれている状況に信じられず、一人叫ぶが応えてくれる人間は誰もいない。

高井はふと思い出したことがある。あの石を拾って、それから……。ジャージのポケットを確認すると、そこには先ほど拾った石があった。

「…んなわけない、よな」  
馬鹿馬鹿しい。

高井はそう思った。

確かに自分は漫画・ゲーム・特撮物は好きで、あることをきっかけに異世界に行ってしまうというネタは見たことはあるが、現実になんかことは無い。しかし、今のこれをどう説明していいか分からないのも事実だった。

「…まずはここがどこか分かっていないとな」

再び高井は空を見上げる。どう見たって今は夜だった。昼間では無い。

その空に二つの影がこちらに降りてくるのを見た。「落ちる」という表現にはあまりにも程遠いものだった。それが確認できるようにになると高井は驚愕する。

「人が…空から降ってきた…！？」

ちよつと待て。先ほどの状況でさえもまだ理解していないのに人が空から降ってくるなんてあまりにもひどすぎじゃないか。驚く高井をよそに二人は降り立ち、高井を見る。一人は金髪で着ている黒い服と同じ色のマントを羽織っていた。よく見るとまだ10にも満たないような少女。もう一人は髪の色が赤く、腰まで届きそうな長い髪。自分のスタイルを強調している服を纏っていた。歳にすると自分と同じか少し上ぐらいの女性だった。ただ、変わっているとすれば獣耳と尻尾がついていることだ。空から降りてきた時点でそういう話ではないが。

高井は不可思議な物をたくさん見せ付けられ、混乱していた。

「あの…君らは」

「ごめんなさい」

金髪の少女が小声で謝罪の言葉を口にし、高井は聞き取れなかったので「何か言った？」と聞く前に手に持っていた物を振りかざす。それは金色の光を放つ鎌状の刃だった。

「ッ！」

とつさに避け、少女の攻撃は外れ、さっきまで高井がいた場所を穿ち、穴が開いていた。それを見た高井は血の気が引くような感じがした。もし避けなかったら自分がその状態に…。

少女の方を見直すと鎌を構え直していた。もう一度高井に狙いをつける。

「い、いきなり何するんだ!？」

あまりのことで少女に問いたですが、少女は何も言わず、しかし、

どこか陰があるような表情をするが今の高井にそんな事を気にする余裕が無い。

そして高井に狙いをつけ、駆け出した。その攻撃は自分の首元を狙う。

しかし、またしても当たらなかった。高井が普段の自分とは考えられない速さで上段の攻撃を避ける。

すぐに体制を立て直し、少女との間合いを取る。

そして、今に至る。

あれから高井は少女の素早い攻撃に翻弄されながらも、一撃も喰らっていないかった。高井としてはその一撃が命取りだが。そもそも、何故自分が見たこともない少女に襲撃を受けなければならないのか分からなかった。少なくとも空を飛んできたり、コンクリートを破砕ような人間なんか知らない。

少女と間合いを取り続けているがさすがに苦しい。走っているときも苦しい時があるが、今感じている苦しさはそれと全く違うものだった。

「それを渡してください」

突然、少女から言葉を掛けられ、高井はそれを考える。

それ…？「それ」ってなんだ？何かオレが持っている物を渡せと言うのか？なんだっただけ…？

「あんださあ、すばしっこいのは分かったから渡してくれないかなあ？」

後ろから声を掛けられる。もう一人の女性が後ろで空に浮いているのが確認できた。

「これ以上、痛い思いはしたくないでしょ？ねえ」

ニヤリと、高井に脅しをかけてくる。高井はそれに恐怖を感じた。しかし、それと同時に怒りもあった。

「いきなり襲いかかって、いきなり渡せと言われて渡せるかよ」

普段の高井は初めて会った相手には敬語で喋る傾向があるが、今の状況はその限りではなかった。

「そうかい、なら勝手に貰っていくよ」

「だから…ッ!？」

いきなり自分の体が動かなくなった。何が起きたのか高井には分からなかった。体を下を向くと自分の体の周りに赤い文様のような物がまとわりついていていた。

「フェイト、バインドを仕掛けている今のうちだよ」

フェイトと呼ばれた金髪の少女は鎌を持ち、もう一度狙いをつける。

「本当に、ごめんなさい。こんなこと、したくはないけれど」

プチン…

「ふざけんなよ…」

「え…?」

フェイトが謝罪の言葉を投げかけたとき、高井の怒りは頂点に達した。

「悪いと思っているなら、最初から強盗まがいなことしてんじゃねえよ…」

パキパキ…。

「え…!?!」

バインドから軋むような音がしているのを聞き、今度はフェイトと女性が驚きの表情を見せる。

「こっちはなあ、自分の競技が終わってこれから飯、食べるはずだったんだよ…!」

パキパキ…!

「ところが、いつの間にか夜になってるわ、こんな訳の分からん場所にいるわ、その上いわけのない理由で襲われるわ…!」

パキパキ…!

次第にバインドから軋む音が大きくなる。

「こいつ、バインドを!?!」

「そんで、人襲ってごめんなさい…?本当に悪いと思うなら、まずは人の話を聞けよな…!!」

親から人の話をちゃんと聞けって、言われなかったか!?!」

「！」

フェイトの表情が何かに気付いたかのような表情をする。

「分かってんのか…このボケがあ！？」  
「パキン！！」

バインドが引きちぎられ、女性は今見た光景が信じられないといった表情となる。そしてフェイトは高井の言葉を聞き、俯いていた。

「はあ、はあ…ふう」

バインドを壊し、冷静になると高井はフェイトを見て「少し言い過ぎたかな」思っていた。

後ろに立っていた女性が高井を睨みつけるように見ていた。

「あんた…フェイトによくもそんなひどいことを！」

「やめてアルフ！」

「フェイト！？」

今にも高井に襲いかかりそうな女性、アルフを止め、フェイトは高井の前に立つ。

「…あなたの言うとおりです。本当にごめんなさい」

フェイトは光を放つ刃を消し、頭を下げた。そこまで悪い子ではないようだ和高井は認識した。

「…オレの方こそ、ごめん。あまりのことでちょっと気が立ってた」



なんとなく居心地が悪そうな感じがしてあまりいい気分ではなかった。

高井は一般的には優しいと言われるような性格だ。その上で良くも悪くも、喜怒哀楽がはつきりとしている。今回は怒りの部分が強く出て、久しぶりにキレた。昔は怒りの部分を強く出し過ぎて周りから注意されてきた。今ではある程度感情をコントロール出来るようになったがまだ甘い和高井は思うのだった。ましてや、相手はまだ幼い少女。自分は今年で高校生になったばかりだ。あまりにも馬鹿馬鹿しい。情けないにもほどがある。先ほどの行為を時が経てば経つほど愚かだと思った。

「あなたに、お願いがあるのですが…」

さつき、何かを渡して欲しいと言っていたことを思い出す。

「何かオレが持っている物で、欲しい物があるのか？」

「あ、はい。実は…その…」

何を恥ずかしがっているのか、しどろもどろになっているフェイト。さすがに高井はこれからフェイトが言うことに横槍を入れることは出来そうになかった。

フェイトがこれから言う言葉を待つ。そして、顔を赤くし、勇気を振り絞って叫ぶ様に言った。

「ジュエルシードを、私に下さい！」

ジュエルシード？聞き慣れない単語に頭を傾ける。薄々、気付いているが、一応特徴を聞いてみることにした。

「それって、どんなヤツかな？」

「え？えつと…、青い石のような物で…」  
「ひよつとして、こんなヤツ？」

フェイトはジャージのポケットから取り出された青い石、ジュエルシードを見つめていた。まるで、ずっと探し求めていたような目だった。

「一つだけいいかな？君はこれをどんなヤツか知ってるのかな？」  
「…ごめんなさい。私もよく知らないんです。ただ、力が強く、持ち主の願いを叶える物としか分からない。私達には必要な物と…」  
「誰かの頼み、ということを集めているのかな？」  
「はい、そうです…」  
「そっか…」

この子にはこの石のことについて聞いても意味は無さそうだ。  
話を聞き、高井は持っていたジュエルシードをフェイトの前に出す。

「あげる」

「え？」

フェイトは襲い掛かった人にあげると言われて、戸惑った。

「やり方がかなり強引だったけど、そこまでしてまで欲しかったんだろ？だからあげる」

今の高井には先のような怒りに任せた言い方とは打って変わって、優しく諭すような口調で言う。

「さっきはごめんな。はいどうぞ」  
「あ、ありがとう…」

ジュエルシードはフェイトの手の中に収まり、その表情は大変嬉し

そんな物だ。さっきまでの陰があるような顔とは違う物だ。

「あんた、なんでわざわざ…。そりゃ、あたしらとしては嬉しいけどさ」

アルフは高井がフェイトにジュエルシードを渡したことが信じられないのか、それについて尋ねる。

「なんでって…。オレもこのジュエルシードについて聞きたいこととかあるけど、だからオレが持っていても意味が無いと思ったんだ。けど君らは目的があつてこれを求めていたんだろ？だからあげようと思ったんだよ。それに」

「？」

高井はもう一度フェイトを見る。

「この子なら、そこまで変な事に使用するとは思えないからな」

「あつ…」

その言葉にフェイトはジュエルシードをくれた喜びと、襲い掛かった自分を信じてくれた感謝の気持ちでいっぱいになり、それは言葉に出来ないほどだった。

「あんた、最高にいいヤツじゃん！」

「うおっ！？」

突然アルフに抱きつかれ、びっくりしてしまう高井。アルフはそんな高井に構わず、胸に顔をうずめ、頬ずりをする。

「た、頼むから、離れて、くれないか…動けん…」

「なーによ。アンタひよっとして照れてるのかい？かわいいねえ」

「だから、動けんって、言ってんだ…」  
「あつ、そうだ」

ようやく抱きつくのをやめ、自由に動けるようになった。

「アンタの名前、聞いてなかったね。アンタ、名前なんて言うの？」  
「アルフ、そういうときは自分から言わなくちゃダメだよ」  
アルフは「そうだったね」と言い、下がった。

「わたしはフェイト。フェイト・テストロッサと言います」  
「あたしはアルフ。フェイトの使い魔さ。で、アンタは？」

高井は自分の出番が来たので名乗る。

「オレは高井 翔一。学生だよ」  
「タカイ…シヨウイチ？」

フェイトは日本人の名前は姓が先に来るのを分かっているのか不思議そうな顔をしていた。高井が補足を入れる。

「『高井』が姓で『翔一』の方が名だから、名前を呼ぶときは翔一の方がいいかな」  
「じゃあ、…翔、一」

自分より年下の人間に呼び捨てで呼ばれるのはあまりいい気がしないが、目の前にいる少女にはそういった嫌悪感が無い。むしろ、「よく言えました」と言いたくなるような言い方だった。高井はふと思った。

この子、フェイトはあまり人に慣れていないのかな、と。

さつきジュエルシードを渡してほしいと頼む時。そして今、何かを確かめるように「翔一」と呼んだ時。アルフ以外の人間とはあまり

喋ったことが無いのだろう。

「あっ！オレ、フェイトとアルフさんに聞きたいことがあるんだっ  
た！」

高井はあることを思い出し、声を張り上げる。フェイトは「な、何  
！？」「と言い、びっくりしてしまふ。そして、高井はフェイトに今  
まで聞きたかった事を聞く。

「ここ、どこ？」

魔法を操る少女と走る事を愛する少年が出会うとき、二人は何を見  
るかはまだ、知らない…。

## 第一話（後書き）

ハイジ「第一話はこれにて終了です」

高井「今回はオレ、フェイトから逃げてばかりじゃん」

ハイジ「そりゃそうだろ。君は足は速いが、戦いとかしたことはないだろ」

高井「そりゃあ、まあ…」

ハイジ「だからフェイトの攻撃は回避させまくりました。君の1500mの速さの秘密はその逃げ足にある」

高井「そんなわけあるか！練習の結果だ！それよりも、オレ9歳のフェイトにあんなひどいこと言わせて大丈夫なのか…？」

ハイジ「そこなんだが、オレも書いてていいのか、これ？と思ったよ。9歳フェイトを思い切り怒鳴りつける主人公なんて聞いたことが無い…。そこはチャレンジだ！」

高井「いらんチャレンジすんな。読んでくださった皆様。こんな話でスタートしましたが、よろしくお願いします」

## 第二話（前書き）

第二話です。ではどうぞ。

少し修正を加えました。

## 第二話

「ここ、どこ？」

ようやく、高井は一番聞きたかったことをフェイトとアルフに聞いた。

「アンタ、この町の人じゃないのかい？」

「そう言えば、さつき『分からない場所に』って言ってたよね。

ひよつとして翔一は次元漂流者かもしれない」

「次元漂流者？」

高井には聞き慣れない言葉だった。

漂流というのは何となくが分かる。映画とかで船が難破して、海流に流されて目が覚めたらそこは知らない国だったり無人島だったりとかする。

高井の漂流の知識としてはそんな物だった。では次元とはなんなのか？

それを考えたとき、一番有り得ないと思っていた事が実はそれが正解ではないのか、と思い始めた。とりあえずそれをフェイトに聞いてみる。

「あ、あのさ、その…次元漂流者って、ひよつとして…何かが原因で、自分がいた世界から違う世界に流れ着いた人の事を言うの…？」

「あ、はい。そうです」

「そして、ここは…違う、世界…なのかな…？」

「はい」

フェイトが高井の質問に答えたとき、高井は「マジかよ…」と呟き、



告げられた事実に驚いていた。

「あんたはジュエルシードの力のせいでこの世界に来ちゃったのかもしれないね」

「ジュエルシードのせいってどういうことなんですか、アルフさん」

「アルフでいいよ、翔一」

「あ、ああ、分かったよ、アルフ」

高井に敬語で喋るのをやめさせ、アルフが話を続ける。

「ジュエルシードはあんな小さい石みたいな物でも、強い力を持つんだ。例えば、その人の願いを叶えるとか」

「ちよつと待って。オレは別の世界に行きたいとか思ったこと無いんだけど」

「アンタの自覚とか無くてもそういう望みがどこかにあつて、それにジュエルシードが反応したとか、ね」

「んなあほな…」

ジュエルシードの力を聞き呆然とし、「あんまりすぎる」と呟いた。

「でもさ、そんなとんでもない物が何でオレの世界にあるんだ？」

「ジュエルシードが力を持っているから、次元を越えることだつて出来たんだと思う」「それでたまたまオレが拾ったってことか…」

二人はどうやってオレが持っているって分かったんだ？」

「アンタのいた場所にジュエルシードの反応があつたから。その後にもアンタから魔力を感じたからね。アタシらはアンタがジュエルシードを使って何かしようとした魔導師と思って、アンタの所に行き、攻撃しちゃったんだけど見当違いだね。ごめん」

「それはもういいけど、魔力と魔導師って？」

また高井には聞き慣れない言葉が出てきて、本当にここは違う世界なんだな、と考えてしまふ。それに関しては、フェイトが答え始めた。

「翔一は…魔法って信じる？」

「…はっ？」

普通なら「何を言っているんだ」というところだが、今までの経緯を考えると「魔法」と考えた方がよいと思った。フェイトがそんな冗談を言うのも考えづらい。

「魔法が何なのか知らないけれど、君らが空を飛んだり、光みたいなを出したりする事が魔法だと言うなら、信じる以外無いよ」

「信じて、くれるんだ…」

自分の言ったことを信じる人が目の前にいてくれた事にフェイトの顔が微笑みを浮かべる。

「ん？だとすると、オレも二人みたいにあんな魔法とか使えるわけ？」

「うん、練習さえすればね。後は、デバイスがあれば…」

「デバイス？フェイトが持つてるそれか？」

フェイトが両手に持っている杖のような物に注目した。それが魔法の杖というには少し機械的なフォルムで高井が思っているような「木で出来た杖」とは違っていた。

「うん。これはバルディッシュ。私の大事な子…」

「へえ…、これがデバイスかあ」

顔を近づけてバルディッシュを珍しそうに見る。すると

《初めまして》

「うおっ!？」

突然バルディッシュが喋り出した。よく見ると、バルディッシュに埋め込まれた金色のガラス玉のような物が点滅していた。

《私が主から紹介されたバルディッシュです。以後、お見知りおきを。高井 翔一》

「は、はい…どうも…」

バルディッシュから丁寧な挨拶をされ、思わず高井もお辞儀して挨拶をする。

ジュエルシードをきっかけに迷い込んだ世界は魔法の世界で、魔法などフィクションの物だと思っていたのが異世界だと普通に現に、目の前にいる二人の人物がそれを証明している。そして、それを使える力が自分にもある。不謹慎にも、自分が陥っている状況を考えたらそんな事を思っている暇は無いのに、不思議とワクワクしてしまう。

「この街の人達…」

ぐう。

「…」  
「…」  
「…」

今の音は何かと思い、音の正体が腹の虫が鳴った分かったとき、その音の発生源を辿ると一人の少年に辿り着いた。

「そういえば、まだ昼飯食べてないんだった…」

「ふう、食った食った」

ようやく昼食　今の時間を考えたら夜食だが　を取った高井はご満悦な表情だ。ちなみに、フェイトはさっきまで着ていた服　バリアジャケット　から今は普段着に変わっており、それに高井は驚いていた。

「ほんと凄い食べたね」

「まあな。たくさん動いたらたくさん食べる、だからな。けどアルフはオレ以上に食べてたしな…」

その後、高井達三人は深夜でも営業しているファミリーストランに入ろうとしたのだがそこで問題が発生した。フェイトとアルフはお金を持ってきていなかった。唯一財布を持っていた高井がおごる形で解決した。最初は断ろうとした二人だが、高井に押し切られた結果となった。今は食事終えてフェイトが住んでいるマンションに向かっている。泊まること無いということでフェイトが家に泊めてくれると聞き、その場で承諾したが少し不安になった。

「しかし、大丈夫かな？夜にオレがフェイトの家に押しかけて。お

父さんとお母さんから何か言われそうなんだけど」  
「大丈夫だよ。家には私とアルフしかないから」

それを聞いたとき「えっ？」と聞き返した。

「…母さんはいるけれど、母さんは今仕事が忙しくてあまり家にいないんだ」

「そっか…」

「でも大丈夫だよ。いつも、アルフがいるから」

それ以上フェイトに対して聞かなかった。これは他人の家の事。自分が入っていい領域ではない。フェイトがそう言うが、高井にはそれが見かけだけだと判断した。どんな家庭の事情があれど、フェイトのような少女にとって親が家にいないというのはどれほどの孤独感なのか、それは本人にしか分からない。

ようやく、三人はフェイトとアルフの生活の拠点であるマンションに辿り着いた。普通のマンションというには少し高級な外観だった。マンションの内部も見ながら内心「すげえな…」と思いながらフェイト達と共にフェイト達が生活している部屋に入った。

「おじやまします」

中に入ると、少し部屋を見てみた。室内はとても広く、二人だけで生活するには広すぎるぐらいだ。しかし、全体的に殺風景で生活に最低限な物しか置いていないように見えた。

「ここ、座ってもいいかな」

「いいよ」

フェイトに許可を貰い、ソファアに座り、今まで肩に掛けていたスポーツバッグを自分の足下に置く。安心しきったのか、急にどつと体が重くなったように感じた。

「シャワー浴びるけど、フェイトもどう？」

「アルフ、わたしたちよりも浴びた方がいい人がいるよ」

「あー…確かにね」

二つの視線はソファアーにもたれている高井に向かっていた。

「オ、オレ？別にオレは後でもいいよ」

「けど、ちよつと…」

フェイトは何かの臭いを気にしているようなしぐさをしていた。

高井はその意味を理解し、ソファアーから立った。

「悪い。今すぐ浴びる」

この世界に転移するまで高井は夏真っ盛りの中でインターハイに出て、走っていた。フェイトはその時に走った高井の汗の臭いを感じ、不快感を表したのだ。それに気づいた高井はすぐにシャワーを浴びた。

「出たぞー」

フェイトから入るときに「ちゃんと綺麗にしてね」と念を押され、普段より時間をかけてシャワーを浴びた。シャワールームから高井が出たのを確認したフェイトとアルフはテーブルの上に置いてあったバスタオルを手に取り、シャワールームに向かう。

それを見届けた高井はソファアーに向かった。スポーツバッグから携帯電話を取り出し、試しに電話をかけてみた。が。

「だめか…」

予想通り、繋がらなかった。電話を閉じ、ソファーに寝転んだ。

「異世界、か…」

フェイトとアルフがシャワールームから出てきたころには、高井はすでに眠っていた。

「寝ちゃったみたい、だね」

「そうだね、フェイト」

高井は完全に熟睡しており、ちょっとやさそつとでは起きるものではなかった。

「このままじゃ、風邪引いちゃうね」

「アタシが布団を持ってくるよ」

「お願い、アルフ」

そう言いつと、アルフは掛け布団を高井にかけてあげようと部屋から出た。

「翔…」

フェイトは寝入った少年の名前を呼んだ。しかし、案の定起きな

かった。

フェイトにとっては初めて知り合うアルフと母、そしてかつていた山猫の使い魔以外の存在。それは自分より年上であるう異性の少年。

最初は自分の目的のために今眠っている少年、高井 翔一を襲い、その行為に怒りを示され、自分の行いを恥じた。その後、予想外な出来事が起きた。高井からジュエルシードを渡してくれて、高井を魔導師と誤認し、襲ってしまった自分を信用してくれた。

日付は変わってしまったているが、今日この日はフェイトにとって、忘れられない日となった。

「ありがとう」

聞いているわけがないと分かっているけど、フェイトは高井に「ありがとう」と言いたかった。それはいろいろな想いが詰まった「ありがとう」だった。

「フェイトー、布団持って……って寝ちゃってるよ」

アルフが布団を持ってきた後にはフェイトも高井に寄り添うように熟睡してしまった。

「ふふ、ほら。フェイトも風邪引くよ」

フェイトを抱きかかえ、アルフはフェイトをベッドに連れて行く。フェイトをベッドに寝かせた後に高井に掛け布団を掛けてあげた。

「アタシも寝ようっと。お休み、翔一」こうして、1日が終わった。



## 第二話（後書き）

ハイジ「なんとか話は作れるものなんだな。正直良かった」

高井「後は誤字脱字を抜かせば、ね」

ハイジ「今更かもしれないけど、読んでくれたの人の感想の返信でも書いたけど、フェイトってロマンシング サ・ガ1のアイスソードの件をジュエルシードでやってるよな？」

高井「今考えると確かに……」

ハイジ「君があそこで『ねんがんの ジュエルシードをてにいれたぞ！』と自慢したら君はフェイトに『殺してでも うばいとる』をされ『な、なにをする きさまらー！』と言うハメに……」

高井「やめてくれ……。あのときはギリギリだったんだから」

ハイジ「フェイトの性格からして、殺しはしないだろうがな。アイスソードの件が気になる方は是非ともニコ動で。以上、最近はサガシリーズがマイブームな作者でした」

### 第三話（前書き）

ハイジ「先週書き始めて、やっと終わった…」

高井「しかも、まだ物語は動かないんだな…」

ハイジ「もうそろそろ動くさ…多分」

高井「多分ってなんだよ。では、第三話どうぞ」

### 第三話

夢を、見ていた。

その夢は昔からずっと願っていたものだった。少女の目の前には昔のように笑いかけてくれる母。横にはいつも少女を慕ってくれる狼の使い魔。

少女はいつぞやの様にピクニックに母と一緒に互いの手を取って笑い合っていた。

少女は狼の使い魔と共に追いかけてっこをし、母はその光景を楽しそうに笑っている。狼の使い魔は茂みへと入り、少女はそれを追いかけていく。

いつの間にか少女は使い魔を追いかけていく内に自分がどこにいるのか分からなくなっていた。少女は疲れ果て、ひときわ大きな木に座り込んだ。すると、雨が降り出した。雨は徐々に強くなり、ついには大雨と言っても差し支えないぐらい雨足は強くなった。激しい雨は地面、少女の体を強く打ちつけ、体温を徐々に奪っていく。その雨足が強くなれば少女の心をも蝕み、我慢していた感情もだんだんと我慢が出来なくなり、遂には涙が流れた。

泣いてはダメ。泣いちゃいけない。母さんから泣いちゃダメと言われてるのに。

少女はその小さな体を縮ませ、あることを願った。

『誰か、助けて』

その時だった。いつの間にか少女を打ちつける雨の感触が無くなった。まだ雨は降っているのに。自分から雨を防いでくれた正体を確認してみる。

それは、母や狼の使い魔がヒトになった姿よりも幾分か背が高く、少女に大きめの傘を差し出して雨を防いでくれた。

そして、それは少女に自分が着ていた上着を掛け、手を差し出した。そして、少女はその手を取り…。

「ん…」

夢から覚め、少女は周りを確認する。自分は確か、昨日の次元漂流者の少年を家に泊めてその後は…。

自分は「ありがとう」と言った後に眠ってしまい、今はとなりに眠っている使い魔に抱えられたのだろう。

「もう起きよう」

体を起こし、少女、フェイト・テストロッサの一日が始まる。

半ば眠気がまだ覚めない。その目であまりを見回すと全く見慣れない物ばかりが飛び込んできた。「ああ」と思いながらまた確認する。「ここ、オレの部屋じゃなく、フェイトの家だった」と。

自分はあるのままで寝てしまったのだろう、その上、ご丁寧に布団まで。お礼が言いたいところだ。

高井は時間を確認するためにテーブルに置いてある時計を見ようと体を起こす。

「7時か…」

普段なら朝練で早く起きるが、今日は寝るのが遅かったのかもうこんな時間になっていた。

「便所に行くか…」

便所から戻ると、フェイトと少し大きい犬が上のベッドルームから降りてきた。一緒に降りてきた赤毛の犬を見て珍しい犬だなと高井は思う。

「おはよう、フェイト」

「おはよう、翔一」

「まだ眠いけど、おはよう」

この時、ここにはいないはずの女性の声がした。

「…あれ、アルフがいないのになんで声が？」

「アタシはここだよ」

「えっ？」

フェイトの横からのっそりと赤毛の犬が高井の前に出た。

「アタシがアルフだよ」

「なあ！！？」

突然犬が喋り出し、しかも自分はアルフと名乗り出た。この状況で驚かないわけにはいかない。

「犬が喋ったあ！？」

「失礼だね！アタシは狼だよ！！」

「お、狼い！？」

犬だと言ったら怒られた高井。全く意味が分からなかった。その後、赤毛の犬 否、狼は光に包まれ昨日フェイトと共にいた女性の姿になる。

「な、なんでアルフは犬 じゃなかった、狼になれるんだ？」「言わなかったっけ？アタシはフェイトの使い魔だって」

「使い魔…」

そんな事言っただけ、と高井は思う。気にはなっていたが、昨日は疲れていたのと、空腹ということもあって聞く気がしなかった。

「実際見ると驚くよ。動物から人になるなんて…」

「…次、犬って言ったらガブツと行くからね」

その言葉を聞いた高井は素早く何度も首を縦に振った。

「えっと…、それじゃあ朝ご飯にしようか」

「ああ、そうだな」

そんな朝の喧騒を終えて、三人は朝食を取ろうとする。このときに高井はこの家の暮らしぶりを目の当たりにする。

「…」

高井はテーブルに並べられた料理を見て、黙ってしまった。

「どうかしたの？翔一」

「いや、何でもない…」

テーブルに並べてあったのは冷凍食品とインスタント食品ばかりだった。高井も食べるときはあるが、ほとんどはご飯と味噌汁、そしてお魚か卵料理、そこに野菜などバランスが取れた食事だった。高井が以前いた世界では陸上部だったためそのことは基本中の基本と教えられていた。そして、まだ成長段階である高井にとってはこれらの食事は大切なことだ。それはフェイトも同様だ。いや、自分よりも重要と高井は考える。しかし見た目はまだ8〜9歳ぐらいのフェイトがこればかり食べていては体を壊す。親がいないということも含めるとそうならざるを得ないというところか。

しかし高井は別の問題に目を向ける。アルフがヒトの姿でドッグフードを食べていたのだ。

「アルフ、お前は何を食べてんだ」

「何って、見ればわかると思うけどドッグフードだけど？翔一も欲

しいのかい？」

「そんなわけあるか！ヒトの姿でドッグフード食べるんじゃない！金の無いマイナーリーガーかお前は！！」

二人にはよく分からない事を高井は口走る。朝食を済ませた後に高井は冷蔵庫の中身を見ようとした。テストロツサ家の人間が一体どういった食生活を送っているか見るためだ。冷凍食品などでいっぱいになってやいないだろうか、冷蔵庫の中身を見た。翔一は予想通りな状態で額を押さえた。横からアルフがやってきた。

「どうしたのさ、翔一？」

「…ここの家の人間はどういう暮らしをしてるのか、よく分かったよ…」

しばらくくつろいでいると、高井はフェイトとアルフにある提案をする。

「フェイト、ちょっと買い物に行ってもいいかな？服とか、身の回りの物を買いたいんだけど」

「うん、それがいいと思う。翔一、それしか持っていないよね」

フェイトのいう「それ」とは昨日から高井が着ている陸上部のラニングジャージだった。白を基調とし、後ろの首から腰に当たる所にまで水色に近い青のラインが入っているデザインで、下は上の色を正反対にしたデザインだ。

上の左腕部、下の左の腰部に英語の筆記体で「S・Takai」とネーム入りの刺繍が入っている。高井はこの陸上部のジャージを気に入っている。何故なら、このジャージのデザインは高井が考えた物なのである。ウェアのモデルはそのメーカーの最新モデルで色



などのアイデアが部員からたくさん出され、高井のアイデアがチームジャージとして採用されたのだがこの話とは関係が無いので割愛する。

そんなお気に入りでも一張羅ですつと生活していくのも辛いものがあった。そもそもこれはランニングウェア。走るときに着てこそ意味があるのだ。

「ああ。というわけで地図、貸してくれないかな」

「一人で行くの？」

「なんかまずいことでもあるのか？」

何かを言おうとするフェイトに高井はフェイトの目線に合わせてしやがむ。フェイトは顔を赤くしながらも高井に何かを伝えようとする。

これって昨日のパターンじゃないのか？ということとは…。

昨日のジュエルシードの件について考えているとようやくフェイトが口を開いた。

「わ、わたしも、一緒に…行っても、いい、かな…？」

「別にいいよ」

「え？」

「フェイトが自分から何かお願いするときってそういう言い方になるんだよな。でも、オレの買い物なんかについて来たって面白くないと思うぞ。それでも来る？」

顔を赤くしたフェイトは首を縦に振る。

「…分かった。じゃあ行くか、フェイト」

それを聞いたフェイトは微笑んで「うん」と答える。そのときアルフが立ち上がった。

「だったらアタシも行くー！」

「アルフ!?」

「なんか面白そうだからアタシも行くよ」

「ああ、別にいいよ」

「翔一!?!」

高井は上を早速スポーツバッグから財布を取り出す。今の所持金を確認してみた。高井にはインターハイに出場が決定した際に家族や周囲の人達から祝い金を貰い、そして小遣いも多めに貰い財布の中身が普段より暖かい。確認すると安い服なら二、三着買っても痛くもかゆくもない金額だった。欲を出して、練習用のランニングシヤツ、ランニングパンツを買ってもまだ残る。このとき高井は思った。「インターハイに出ていてよかった」と。

「よし、行くか」

「うん…」

先程までは行きたがっていたフェイトがどういうわけかやや不機嫌な顔になっていた。

「フェイト、やっぱり行きたくないのか」

「そんなことない…」

「?」

何故フェイトの機嫌が悪いのかは本人は知らない。

「さて、どこで服を買うか…あんまり高いのは勘弁だしなあ。二人はどこがいいか知らない？」

休日の街は様々な目的を持った人間が行き交いしている。高井翔一、フェイト・テストロッサ、使い魔のアルフの一組もその一つだ。

「実はさ、アタシ達もよく知らないんだよね」

「えっ？」

「アタシらも最近この町に来たばかりだからね。ジュエルシードを探索するために外に出ることはあっても、翔一みたいにどこか買い物に出かけるみたいなのはあまりしていないんだ」

「そうか…。じゃあ、地図見ながら探すか」

周りを見回せば、人ばかりだった。高井はこの間テレビで見たアニメでボスらしきキャラが大量に人を殺すシーンがあり、そのキャラが「人がゴミのようだ！」と叫んでいたのを思い出す。

人はゴミではないが、それくらいに多いのだ。その人の多さにフェイトはどこか歩きづらそうに歩いていた。ぶつからないように歩いているようだがかどこかおぼつかない。それを見た高井はフェイトの手を取る。

「えっ？翔一？」

高井の行動に驚きを隠せないフェイト。フェイトの頬が赤くなる。

「こうしておけば、はぐれるってことは無いだろ。さっ、行くか」

そして二人はそのまま歩き出し、アルフは二人の後を追う。

高井に手を握られたフェイトは気恥ずかしく思いながらも、高井の手から離れないようにして行った。

そして、ようやく洋服屋にたどり着いた三人。最初のフェイトとアルフは高井の服選びを手伝おうと高井に合った服を選んでいた。しかし、

「フェイトー、これなんか翔一に似合ってると思うんだけどー」

「でもこっちだっていいと思うけとなぁ」

「あのさ…オレに選ばせる権利は…？」

『無い』

「あつ、そうですか…」

今の高井は二人の着せ替え人形と化していた。今日この日でシャツや下着や靴下以外の服、上下合わせて四着を買った。その服の中で高井が選んで買った服は、ゼロだった。

「楽しかったね、アルフ」

「そうだね、フェイト」

楽しそうに会話する二人だが、着せ替え人形にされた高井は憔悴していた。

「そ、そうか…。それはなによりだ…」

二人に着せ替え人形にされた高井は買ったばかりの服の中で一番気に入った服を着ていた。上には黒シャツにデニム生地の上着を羽

織る。下は着ているシャツと同じ色のジーンズを履いている。後の服や着ていたランニングウェアはみんな袋に入れてある。

「二人とも、次行くぞ」

「次？」

「次ってどこ行くのさ」

「地図を見たときから行きたかった所があるんだ。まさかこの世界にもあったとは…まさに青天の霹靂、いや、千載一遇の好機と見た」

「しょ、翔一？」

翔一のテンションがおかしな方向に向かって行っているのを見てフェイトとアルフはあっけに取られる。

「ああ、悪い。ちょっとあまりの嬉しさでつい、な」

翔一をここまでにさせるほどの場所には何があるのかフェイトとアルフはさっぱりだった。

「先に言っておくよ。オレがその店に行ったら君らの意見は一切聞けないからそのつもりで」

高井のセリフに首を傾げる二人だった。

しばらく歩くとその目当ての場所に着いた。そこは世界でも有名なスポーツメーカーの直営店で特にランニンググッズを多く取り扱っている店だった。

「ここなんだ。オレの世界にもこのメーカーがあってね、一番好きなメーカーなんだよ」

「そうなんだ」

「まっ、すぐに終わるさ。ぱっと見て、ぱっと買うからな。しかし、止まらんぞ」

その台詞の通り、高井は色とりどりのランニングウェア、サンングラス、チタンネックレス、普段履き用のスニーカーを気に入った物を見てすぐにカゴに入れていた。2人はその買い方に口を挟んだ途端「オレの道を阻むなあ！」と怒られた。そのまま会計を済ませ、今度は高井が満足気な顔をしていた。

「アンタ、すごい買ったね…」

「走ることに限っては金に一切糸目付けないからな、オレは」

高井が買った品は宅配便で送ってもらい、その時間にはいるであろうという時間に配達してもらったようにした。

「翔一は走ることが好きなの？」

「まあな。こつちに来る前は走ってばかりだったからなあ。凄く楽しかったよ」

前にいた世界では高井は一年生ながらインターハイの1500mに出場していた。高井は出場していた一年生の中ではベストタイムが一番速く、全体で見ても速い部類に入っていた。一年生ながら入賞の期待はされていたが、結局は予選落ちだった。

「翔一は、自分の世界に戻りたい？」

「そうだな…。戻りたいけど、手立てが無いからなあ。フェイトにジュエルシードの探索を頼んでいる人なら分かると思っているからいつか帰れると思うよ」

高井はフェイトに笑いかけるとフェイトもつられて笑顔になる。

「そう、早く戻れるといいね」

「ああ、そうだな」

「フェイトー、翔一。アタシもうお腹空いたんだけど」

アルフの言葉に高井は苦笑い、フェイトは呆れながらも高井に「どうしょっか？」と聞いてきた。

「じゃあどつかで食べるか。何か食べたいもの、ある？」

「アタシは美味しければ何でもいいよ」

「…わたしも、翔一に任せるよ」

「分かった。じゃあ、オレが勝手に決めるよ」

そう言う和高井が選んだ場所はカレー屋だった。その時のフェイトは嬉しそうに笑っているのを見てそれをアルフに聞いたらフェイトはカレーが好物だという。

「ずっと聞きたかったことがあるんだけど」

「なんだ？フェイト」

三人はテーブル席に座っており、注文したカレーを待っている間に、フェイトは翔一に質問する。

「翔一って、何者なの？」

「何者？なんでまた…」

「だってアンタ、フェイトの攻撃を全部避けたり、アタシの仕掛けたバインドを引きちぎったりするからさあ」

アルフは「結構バインドには自身あったんだけどなあ」と付け加えた。

「オレは昨日も言ったけど、あっちの世界では高校生だったし、魔導師じゃないよ。オレに魔力があったとしても魔法の使い方なんて知らないって。ただ、なんなので、バインドっていうのを外せたの

「分からないんだよ」

「それは、あの時翔一が私に怒ったからだと思う」

「どういうこと？」

「怒った事によって、翔一の中にある魔力が開放されてバインドを外したんだと思うんだ」

「それってただ力づくで外したってことにならないか？」

フェイトが頷き、説明を続ける。

「でも、本当はバインドなんて簡単には外れないんだ。翔一みたいにバインドを魔力で無理やり外す人なんてあまりいないよ。特にアルフのバインドを外すなんて相当だよ、翔一」

バインドの構造がどういったものか分からない高井には「バインドは普通は簡単に外せない」というぐらいにしか理解できなかった。

「つまり、オレはバインドを引きちぎるぐらい魔力があるってこと？」

「うん、そういうことになるね。ひょっとしたら、わたしかそれ以上かな」

あまり実感が無いのが高井の思うところだ。フェイトの話を聞いて自分がフェイトと同等以上の魔力を秘めていると言われても分からない。おそらく小さい時からこの世界には存在する魔法を使っていたフェイト。魔法をゲームやアニメの世界の物と思っていた高井には魔法の認識と存在すら大きなズレがある。しかし、現実として自分にもその力があると言われて、どこか期待してしまう。

「そのさ、魔法ってどんなのがあるんだ？例えば、火を放ったりとか椅子を動かすと出来るのか？フェイトはどんな魔法が使えるんだ



「？」

高井の質問にフェイトは答える。

「えっとね、そういうことが出来る人もいるけど、わたしの場合は分かりやすく言うと雷、かな」

「雷？」

「わたしの魔力色は金なんだ。それを電気に変換して、魔法が使えるんだ」

「そうなんだ…」

どうしても某電気ねずみを思い浮かべてしまう高井だった。

「昨日は聞きそびれたけど、この世界の人達ってフェイト達みたいに魔法とか使えるのかな」

「多分、少ないと思う」

「そっかぁ…魔法は二人だけにしか使えないのか」

「…実を言つとね、わたしとアルフもこの世界の人間じゃないんだ」  
「えっ？」

高井はフェイトの口から意外な事を聞いた。

「わたし達の場合は、転移魔法を使ってこの世界に来たの。ジュエルシードを探すために」

「そうだったのか…。大変じゃないか？ たった2人でジュエルシード探しなんて」

「大丈夫だよ。頼んでくれる人の為だから…」

そう笑うフェイト。しかし、高井にはその笑顔にどこか違和感を感じていた。

「そつか。フェイトは偉いな」

「そうかな？」

「オレがフェイトぐらいの歳の時はなにしてたっけなあ…。ただ遊んでた気がする」 高井は当時9歳の自分と現在9歳のフェイトを比べた時、妙な敗北感を味わった。ただ、普通だったら友達と遊んでいてもおかしくない年齢だと考える。フェイトはその歳で見知らぬ世界で途方もない探し物をしている。正直、自分には出来るかどうか…。

「お待たせしましたー」

話していたら、店員が三人分のカレーとサラダを持ってきた。三人は自分達のカレーを前に置いた。

「よし、それじゃ…」

『いただきます』

三人は手を合わせ、カレーを食した。

そのあとは、マンションに戻り高井はまた出かけた。今度は食料品と今晚の夕飯のおかずを買うためだ。今朝のテストロッサ家の食卓を見る限りだと少し改善の余地があると判断した高井は近くにあったスーパーに行き、米、味噌とダシ、調味料。そして今日の夕飯として魚のアジ、そして混ぜご飯を作ろうと高菜とジャコを買った。フェイトとアルフは「そんなことしなくてもいい」と言ったが高井は住まわせている恩があるとしてそれを拒否した。

今日のテストロッサ家の食卓は少しだけ普段より色があつた。高菜とジャコをごま油で炒めて、それを混ぜご飯にしたもの。そして、アジの塩焼きに玉子の味噌汁だった。

「翔一って、料理できるんだね」

「まあな。 たまに料理をする機会があつてね、この高菜の混ぜご飯はオレの親父が教えてくれたんだ。 さつ、冷めない内にいただくか」

フェイトとアルフはその混ぜご飯に満足して、フェイトはそれが気に入ったのか、おかわりをしていた。 そんなフェイトを見て高井は作って正解だったと思うのであつた。 そして、料理のレパートリーも増やそうとも考えていた。

こうして、また1日が終わった。

### 第三話（後書き）

ハイジ「どうも、サガシリーズがマイブームな作者です」

高井「スーファミを押し入れから出したぐらいだからなあ…。今回はスパンが長かったな。さぼりか？」

ハイジ「…サ・ガ3のフリーシナリオが本番を迎えたからな。止められなかったのよorzあと、思ったより話が長くなってたのもある」

高井「今回の話、オレの悪いクセ出まくりじゃないか…」

ハイジ「ちよつとは隙ぐらい見せないとダメよ、あなた」

高井「なんの隙だよ…」

#### 第四話（前書き）

ハイジ「今回は長かったなあ……」

高井「えらい待たせたからな」

ハイジ「長い上に、いつも不安との戦いです。では、第四話をどうぞ」

## 第四話

空の色は明るくなつてはいるが、まだ朝日が昇りきつておらず新聞配達バイクの音がけたたましく鳴っていた。

緑が多い一方通行の道には、人があまりいなかった。たまに散歩をしている人達とすれ違うぐらいだった。違う世界の日本にいてもこの朝の光景は一緒だった。

高井 翔一はこの光景を見て、そこで走っていると心から安心できる。世界は違えど、「走る」という行為が自分を生かしてくれる術だ、と。

この世界に転移し、テストロッサ家に居候してから数日、それに地理も覚えてきた。それに伴い、ジョギングコースも出来てきた。競技場でのスピード練習が大半で、たまに長い距離をゆっくりと走るという日が練習メニューとして組まれている。高井はスピードランナーだがこのゆっくりと走る日が好きだった。ほとんど闘争に近い中距離種目からかけ離れて、この遠見市の朝の景色を見ながら走ることは高井には一種の清涼剤だった。走ること自体がそうでもあるが。

ちようと高井が決めた折り返しポイントで帰るように今走った道を走る。この町を走って数日。おなじ道を走るだけでも細かい部分で変わっているところが発見できる。例えば、建設途中の建物のが出来上がるところが見て取れたりすることができる。普段は軒先に置いてある自転車や三輪車が雨が降っている時は閉まっているなど。それらを見るのが、高井はゆっくりと走るといふ日が、好きだった。

そして、現在の住まいであるマンションに着いた。体操やストレッチをしていると、このマンションの住人が出てくる。おそらく、出勤するサラリーマンだろうと高井は思う。その中には学生と思わし

き姿もあつた。本来なら高井も元の世界で通学をしていた。

「よしっ。戻るか」

ストレッチが終わると早々と自分がいさせてもらっている部屋へと戻る。

「おかえり、翔一。おはよう」

「ただいま、フェイト。おはよう」

扉を開けると、ここに高井を住まわせている少女、フェイト・テストタロツサが水色のパジャマを着ていて、後ろに手を組み微笑みながらいつものように玄関で待っていた。普段は二つに束ねられている長い髪も今はまだ何もされていなかった。

「待つてろよ。今、着替えたら作るからな」

「うん」

脱いだランニングシューズを持ち、自分の部屋に置いておく。基本的に高井はランニングシューズを下駄箱には置かず、部屋の決められた場所に置いておく。この部屋の場合はシューズ袋の上に置く。普段着に着替えた高井は早速朝ご飯の支度にかかろうと台所へと向かう。

「よし、今日は目玉焼きとソーセージな。あと、ミニトマト」

「トマト…」

「フェイト、ミニだから食べやすいって」

トマトに明らかに嫌そうな顔をしたフェイトだった。この数日でフェイトはトマトが嫌いだと知った高井は食べやすいミニトマトでフ

エイトに食べさせようと思っていた。

なんなんだこれは？これじゃあこの子の親みたいじゃないか。

今の発言で高井は妙な感覚を覚えた。自分はただの居候のようなもののに、勝手に人の家のものを触って良かったのかと今更ながら思っていた。ただ、あんな冷凍食品やインスタントばかりだとフエイトのような歳でそればかりだとさすがにまずいと思いながらフエイトにはなるべく簡単なものでもいいから手作りの物を食べさせてやりたい。高井はリビングに行くとならフエイトとは別の意味でまずいと思わせることがあった。

「アルフ：だから、ヒトの姿でドッグフードを食べるなって言わなかったか！？」

「なにさ！アンタ、アタシが狼の姿で食べているときは何も言わないクセして！」

「絵面が色々とまずいんだよ！それから、今食べるな！今作るから待ってる」

フエイトの狼の使い魔である女性、アルフ。一見するとグラマラスな身体を持ち主だが、元は迷い狼の子供で死にかけだった所にフエイトに助けられ、今は使い魔として契約し、狼やヒトの姿になれる、と高井はフエイトから話は聞いた。ヒトの姿になっても残る獣耳と尻尾はその名残だろう。それでも高井は今のアルフを見て「こいつ本当は犬だろ？しかし一応、狼も…」と考え込む。

フエイトがミニトマトに多少苦戦しながら何とか食べきり、今日の朝食の時間は終わった。



少し暇ができたので、高井はリビングでそばに置いてあった携帯ゲーム機に電源を入れ、メモリースティックの中に入っているソフトを起動させた。普段ならこの時間は学校に行っていたり、部活をしているが、今の高井にはそれが無い。最初は午前中の内に走りながら周辺の地理を学ぼうとあちこち走り回っていたが、ある程度覚えてしまった。

ここまでやることが無いのは考え物だな、高井は思う。以前にフェイトから自分にも魔法を扱う力、魔力を持っていると言われたがその扱いを知らない限り、無いのと一緒に。高井もジュエルシード探しを手伝いたいと考えていたが、魔法も使えない自分は足手まといにしかならないと考え、今自分が出来ることは、この家の家事を担当することと割り切っていた。(ただ、洗濯だけはフェイトが自分でやると言われていた)

今は洗濯が回っているのが終わるのを待つまで、高井は暇を持て余していた。この絵だけで見たら、正に二一…。

「オレは違うからな!？」

「翔一…どうしたの？」

「えっ? いや、なんか聞こえたから…。それよりもフェイト、オレまた午後いないから」

「もしかして、走りに行くの?」「ああ、今日は競技場に行こうと思うんだ」

フェイトがソファに座り、高井の方に少しだけ寄った。

「翔一は、本当に走る事が好きなんだね」

「まあな。こうしてゲームをしているのもいいけど、やっぱりオレは走っている方がいいな」

フェイトに目をやりながら、ゲーム機を操作している高井だったが、フェイトの話に集中するために中断して、電源を切り、フェイトの方に向いた。

「翔一は、ここに来る前も走っていたの？」

「あの時はインターハイの1500mが終わった後だったから、そういう事になるな」

「その前も？」

「ああ、高校に入ってから、ほとんど走りっぱなしだったからな。その前は違うスポーツもいくつかやっていたけど、やっぱり走っていることが多いなあ」

友達と遊んだ記憶は少なからずある。しかし、今の高井の人生の大半は走ることが占めていた。しかし、高井はその走ることを楽しんでる。走るという行為もだが、それを通じて色々な人、場所、物事を知っていく。だから、走ることは辞められない。こうなるともはや一種の麻薬みたいなものだった。

「他にも、走ることとは別に何かしていたの？」

「うーん、小学生のときは少林寺拳法だろ？冬は町のクラブでクロスカントリースキーをして、親父からアルペンスキーも教わっただろ。中学生のときはバレーボールとそのまま継続してクロスカントリースキーもしてたな。陸上の大会もそのついでで出ていたな。こんなもんかな」

「いろんなスポーツをやっていたんだね」

「少林寺拳法は三年で止めて、バレーも中学で終わったからあまり身にはつかなかったがな。でも、割と楽しかったよ。沢山、仲間と

も知り合えたからな」

「仲間…」

「フェイトにもいるだろ。友達とか」

そんなときだった。フェイトの表情が曇ったように見えたのは。

「フェイト？」

「わたしは…いないんだ」

「えっ…？」

高井はフェイトの一言で分かってしまった。フェイトには友達がないのと、軽はずみで聞いてしまった自分の愚かさ。

「ご、ごめんつ。オレ…」

「気にしないで。翔一は変なことを言った訳じゃないから…」

しばらく、沈黙が続く。高井は話題を変えようと頭を巡らす。そして、自分もフェイトの魔法について聞いてみようと思った。

「なあ、フェイトは魔法を誰から教わったんだ？」

「わたしは、母さんの使い魔に教えてもらっていたんだ。今はもういないけど」

「いない？どっか行っただのか？」

「うん…。その使い魔から魔法や勉強を教わったんだ」

「そうなんだ…ん？待てよ、学校は行ってないのか？」

今思えばおかしい話だった。いくら違う世界から来たとはいえ、今のフェイトの歳からだ学校に行っていないなど、高井にとっては有り得なかった。

「わたしの家は山奥だったから。ほとんどの事はその使い魔から教えてもらっていたんだ。だから母さんとアルフ、その使い魔以外の人はあまり喋った事がないんだ」

最初、フェイトと喋ったことを思い出した。その時は人に慣れていない理由を他人とあまり関わってこなかったことを予想していたがまさにその通りだった。そして、フェイトに友人がいないのも、そのためなのだろう。

「…フェイトは、友達とかいなくて平気なのか？」  
「平気だよ。アルフがいてくれるから」

フェイトがそう言うのと、高井は狼状態になってすやすやと眠っているアルフを見やる。

「でも、フェイトだって自分と同じ歳の子と友達になりたい、って考えたりしないか？」

「…よく、分からない。そんな事思った事が無いから」  
「そうなのか…」

フェイトが完全な孤独ではないにせよ、フェイトぐらいの歳の子で身内以外の赤の他人、大人でも子供でも、それらと全く関わっていないと聞き、高井は言葉に詰まった。何とか高井は口を開き、フェイトに問いかける。

「…そのさ、フェイト。もし、フェイトと友達になりたいって子が現れたら、どうしたい？」

「わたしと…？」

「うん。オレさ、人が生きていく過程で友達は絶対に出来るものだと思う。フェイトだってそうだと思う。その為にはフェイトも一

歩前に踏み出す事が重要だけど」

「…そうなの？ちよつと、分からないかな」

高井の言葉に首を傾げるフェイト。もう少し分かりやすく言えたらな、と高井は思う。

「フェイトもその子と『友達になりたい』と思ったら、自分からも友達になりたいと言ってみたらどうか」

「でも、どうやってその子と友達になればいいの？」

「…実はオレもよくは知らないんだ。大体が気付いたら友達になつてたことがあるから。でも、きつかけはある」

「きつかけ？」

「例えば、その子の名前を呼んでみるとか。他にも、共通した趣味があつたりとか色々あるけど、一番大事なのは、名前を呼ぶことなんじゃないかな」

「名前を呼ぶ…」

名前を呼ぶ。自身が友達になる上でもっとも欠かせないであろうと思う部分を高井はフェイトに伝える。

「オレから言えるのは、それだけ。後はフェイト次第って所だな」

高井は立ち上がり、話している最中に洗い終わったことを告げていた洗濯機の中から自分の洗濯物を干そうと向かった。

「友達…」

一人残されたフェイトは先程、高井が言っていた『友達』という言葉が頭の中で残っていた。

「なつてくれる人、いるのかなあ……」

フェイトには不安があつた。自分は周りのことをよく知らない。言葉で知っているだけの物ばかりが多く、身近にあるものだけがあつた。人だつて知り合いいはない。身内以外でフェイトと関わりを持った人間はいない。そんな自分に『友達』など。

フェイトはすぐにそれを訂正する。身内以外で自分と関わりを持った人ならいる。

それは突然ジュエルシードの力でこの世界に転移し、今はこの部屋にいて、いつも料理を作ってくれていて、走ることが好きで、何よりも自分に対して笑いかけてくれる人がいる。

「翔一……」

その人の名前を呟き、少しだけ自信が持てた。自分は既に足を一歩踏み入れた、と。

「ここから、かな」

フェイトは、心に決めたように、呟く。

洗濯物をカゴに入れた高井が洗濯物を干そうとフェイトの前を歩く。その足でベランダに向かつていた。それに気付いたフェイトは「まずい！」と言わんばかりの表情をした。

「翔一！開けちゃダメ！」

しかし、高井はそのままベランダの戸を開けてしまった。そして、

「見ないでえー！」

バチーン！！

「ぎゃあ ああああ！！！！？？？？」

フェイトからのフォトンランサー（かなり微弱）により高井は悲鳴をあげ、カゴを落とし、自身は仰向けのまま倒れこんだ。

「ふえ、フェイト……。なにを……」

高井はフェイトに何故こんな事をしたのかを聞く前にそのまま気絶した。

その理由は、ベランダにはフェイト達の洗濯物が干してあったからであつた。それを見られたくないと思つたフェイトは高井にフオトンランサーをぶつけたのであつた。

「あー、帰っても怒ってるだろうなあ……」

午前中の騒動があつてから、フェイトの機嫌は悪く、昼飯時でも全く話しかけてくれず、それどころか拒否さえされていた。アルフからにも「アンタ、フェイトに何をしたんだい!？」と問い詰められ、散々だった。練習に行くときも何も言わず、ムスツとしていたのだった。

「あー、うん。」

競技場でのスピード練習が終わり、今は競技場の傍にある森の中に囲まれた遊歩道で練習後のダウンジョグをしながら高井は一人悩んでいた。

「まさか、あんなに怒るなんて」

しかし、その一方で思っている事もあった。

フェイトにだって普通に嬉しい事があれば笑い、苦手な物があれば少し嫌そうな表情をし、さっきみたいに怒るときだってある、どこにでもいるような女の子だ、と。魔法を扱えると言ってもやっぱりまだ自分よりも幼い少女だ。そんな子が自分と事情が違うとはいえ、異世界で探し物は辛いのではないか。そして、何故フェイトにそんなことをやらせるのか分からなかった。そして、その依頼主は恐らく…。

高井は考え込んでいた。そのおかげである異変に気づくのが遅かった。

「えっ…?」

周りの空気がおかしい。高井が感じたのは日常で感じるものではなかった。そして、木々が風が吹いているわけでもなく、葉っぱを揺らしていた。それが騒いでいるように見えた。

そして、高井は「何か」を感じた。

「なにか…来る?」

その何かが、高井の前に姿を現した。

「なんだ…あれは!?!」



それは、他の木よりもはるかに大きい木の怪物だった。よく見ると目と口らしきものがくつきりと現れていた。そして、周りにある木を吸収しながら大きくなる様子が見て取れる。

「な、なんなんだ、こいつは…?」

全く状況が分からない高井は頭で今すぐに逃げろと警笛を鳴らしていた。高井もその場から立ち去ろうとした。だが、

「!」

木の怪物からの叫びで森の中がざわめく。高井は耳を塞ぐ。木の怪物は動きを止めた高井にツタを使い、振ろうとした。

「っ!?!」

高井に襲いかかるツタ。それは鞭のようにしなり、高井を打ちつけようとした。しかし、それは未遂に終わる。空から黒衣の魔導師が現れ、高井を掴んだからだった。

「フェイト!」

「翔一、ここは私が。アルフ、翔一を安全な所へ」

「OK」

後から現れたアルフに高井を渡し、フェイトは怪物へと向かっていった。アルフに怪物から離れた場所に運ばれた高井はアルフに怪物の事を聞いた。

「アルフ、あれはなんだよ?」

「あれはジュエルシードによって変化したヤツだよ」

「ジュエルシード!? ジュエルシードはあんな物を作り出せるのか!?」

「まあね。正確にはジュエルシードが憑依したものだけど。けど、そのジュエルシードが暴走するとあんなのが出てくるわけ」

アルフの説明に思わず息を呑む。ジュエルシード自体の力は強力なのは聞いていたが、暴走するとモンスターまで作り出すとは聞いていなかった。

「フェイトは、大丈夫なのか？」

「フェイトなら心配いらないよ。あの子は普通の魔導師なんか束になつても叶いつこ無いぐらい強いんだ。アタシはフェイトの援護に回るよ。翔一はそこで待つてな」

空を飛び、フェイトのサポートをするために向かうアルフ。高井はただ、それを見るしかなかった。

「あれが…魔法…」

高井が見る方にはフェイトが悠々と空を飛び、モンスターの攻撃をかわしつつ、バルディッシュで斬撃を加えていた。それは正に蝶のように舞い、蜂のように刺すというものだった。

「すげえ…」

高井はフェイトの飛ぶ姿を感嘆としていた。人があそこまで空を自由自在に飛び回る事ができ、目の前にある怪物に物怖じすることも無かった。戦いは終始フェイトのペースだった。ツタは全てフェイトの攻撃で全て斬られ、そして、フェイトの中で一番強力であ

ろう一撃が入り、決着がついた。

「本当に倒したよ…ん？」

高井はすぐにフェイトの様子がおかしいことに気づいた。それはフェイトが倒したはずの相手がまだ動いていたからだだった。そして、その怪物は巨大化し、遠くにいるこちらもはつきりと分かるように見えた。

「ちょっと待てよ…。明らかにヤバいんじゃないのか？」

高井がそう思った通り、フェイトとアルフは先ほどと違い、戦いづらそうだった。そして、フェイトが怪物に捕まってしまった。

「フェイト！」

フェイトを助けだそうと走り出す。しかし、足を止めた。

魔法を使えない自分に今この状況で何が出来る？しかし、今捕まっている少女を助け出さないと…。この時、自分の無力に嘆き、右足で地面を蹴った。

「くそっ！！」

なんてことだ。どれだけ自分が速くなっただって結局は目の前の事態に対応出来ず、悔しがるだけなのか。

いや、違う。目の前の現象が恐ろしくても、何もしなくてもいいものなのか。今、何もしなかったら、目の前の命が失うかもしれない。あの子には知るべきことが沢山ある。こんな所で、死なせるわけにはいかない。

「オレの馬鹿野郎…！」

再び高井は走り出した。今、苦しんでいる少女を救うために。僅かな可能性を賭けて。

そして、その想いに応えるように力が宿った。

《待ってください》

「！？」

声がした。しかし、周りには誰もおらず、その声は気のせいだと思ひ、走り出そうとした。

《だから、待ってください！》

「なんだ！？」

早く行かないとフェイトが危ない。その焦りから苛立ちを見せる。

「誰なんだよ！さっきから呼び止めてよ…！」

《ここです、主》

「えっ…？」

高井は声の下からしたので不思議に思いながら下を向く。その声の正体は…。

《やっと気づきましたか、我が主》

「…ええー！？」

高井が今履いていたシューズからだった…。

倒したと思った相手が自分か思っていた以上に再生能力が高く、先程斬ったツタは再びフェイトとアルフに襲いかかり、数を増やしていた。そして、まずいことに周りの木を吸収してさっきより巨大化していた。

「くっ、このままじゃ…」

斬っては避けることを繰り返してはいるが、攻撃力もスピードも上がった相手に苦戦を強いられている。アルフも襲いかかるツタの対応に追われていて援護どころではなかった。

「でも、それでも負けられない…！」

フェイトには、どうしても退けなかった。相手がどんな相手でも、どれだけ強くなっても、大切な人を為に、負けられない思いがある。そのために、こんな所では終われない！

しかし、フェイトの想いとは全く真逆なことが起きた。

「がはっ！？」

「アルフ！」

アルフがツタによる攻撃で横から叩きつけられ、吹き飛ばされたのだった。その隙にフェイトの体にツタが巻きつくようとしていた。

「このっ！」

バルディッシュで何とか巻き付こうとするツタを斬る。しかし、数は増え続け遂にはバルディッシュを持っていた腕に絡み付き、バ

ルディッシュを手放してしまった。

「しまっ、かつ、はっ……」

対抗手段を無くしてしまったフェイトは体のあらゆる所にツタが絡み付き、締め付けられた。

「くっ……フェイト……」

吹っ飛ばされたアルフはふらふらになりながらも何とか立ち上がり、フェイトを助けようとするが力が出なかった。

「アタシが……フェイトを……助けなきゃ……！」

タタタタタッ……！！

「オレに任せてくれ」

「えっ？」

一瞬だけ聞き慣れた声がしたので振り向いた。しかし、そこには誰もいなかった。

フェイトの締め付けはだんだんと強くなり、意識が無くなりかけていた。昔の記憶が頭に浮かび、今までにない孤独感を感じた。フェイトはそこで自分が『死ぬ』という事を感じた。

ああ、わたしはここで死ぬんだ。母さんを助けてあげられないまま、死ぬんだ。

アルフは、わたしがいなくなってもしっかりと生きてほしいな。

母さん、今まで…わがまま言ったり、困らせたりしてごめん…なさい。

翔一…。今日は、あなたにひどいことをして、ごめんね。こんな事になるなら…あなたと…もう少しだけ…お話、したかった…な…。

「フェイトオオオ…!!」

誰…なの？

ズバシャアアア…!!

フェイトに巻き付いていたツタが何かによって斬られ、そしてフェイトは誰かに抱えられる感覚を感じた。そして、気付いたらフェイトは誰かに抱えられたまま地上にいた。

「フェイト！しっかり！」

「アルフ…無事だったんだ」

吹き飛ばされたアルフが心配だったが、無事で安堵した。しかし、自分を助けてくれたのは誰なのか分からなかった。おそらくは、今自分を抱えている人が助けてくれたんだろう。

フェイトはその人物を確認した。

何故、この人がここにいいのか分からなかった。ただ、名前を呼びたかった。

「翔一…」

「無事で良かったよ、フェイト…」

手遅れにならず、抱きかかえたフェイトを見て安堵する高井。

「フェイト、バルディッシュを返すよ」

高井はフェイトを救うために落としたバルディッシュを使い、フェイトに絡みついたツタを斬ったのである。意識がはつきりとしてきたフェイトはバルディッシュを受け取り、今の高井の姿を見る。

今の高井の姿は白を基調としたファスナー付きのジャケット、足首にまで達したタイツ、そして足元にはいつも高井が愛用しているシューズが不思議な力を感じさせていた。外見はフェイトがよく見る高井のランニングスタイルだが、高井から感じる魔力がいつもより強い。その時、フェイトは思った。

目の前の彼は、自分と同じ『力』を使えるようになったと。

「翔一、ひよつとしてそれ…！」

「アルフ、フェイトを頼む」

フェイトをアルフに預け、高井は怪物に目を向ける。

「アンタは…どうするんだ」

「あいつと、戦う」

高井はしゃがみ込み、自分のランニングシューズに語りかける。

「オレをサポートしてくれ、”スピードスパイダー”」

《分かりました。では、主のデビュー戦を始めましょう》

ランニングシューズ、”スピードスパイダー”は高井の想いに応



えるべく、インテリジェントデバイスとして生まれ変わったのであった。そして、

「さて、第二ラウンドの開始だ」

高井 翔一の戦いの始まりを告げるのであった。

#### 第四話（後書き）

ハイジ「遂に誕生！翔一のインテリジェントデバイス、その名もスピードスパイダー！やっと出せたあ！！！」

高井「まさか自分のランニングシューズがデバイスになるなんて…。作者さんのお気に入りでもあるよね、このシューズは」

ハイジ「まあな、オレはこれを二色持ってたんだ。その内、片方はまさかのフェイトカラーだぞ」

高井「あれは凄い偶然だったな。しかも格安だったという」

ハイジ「出来れば写真を載せたいところだ」

高井「それで、オレはどんな戦いをするんだ？」

ハイジ「それは次回にな。次回は火曜日に投稿します。それでは」

## 第五話（前書き）

ハイジ「まずはお詫びをしなきゃ…」

高井「そうだな…」

ハイジ「火曜日に更新するとか言っておきながら今日まで引っ張ってしまっでごめんなさい！ それでは、第五話どうぞ」

## 第五話

「しゃ、喋った!？」

フェイトが苦戦している中、高井はあまりのことに驚きを隠せなかった。何故なら、今自分が履いているシューズが喋り出したのだから。

《ようやく、話せましたね。主》

「いや、あの…」

《私はあなたの『力』となる者です、主》

「力…？」

《あなたの眠っている『力』を使うときが来たのです》

「…まさか、魔力の事を言ってるのか？…なら、あの子を助けたい！頼む、力を貸してくれ!!」

目をやると、今そこでフェイトが苦しんでいるのを見た高井は今すぐにでも駆け出したかった。自分にも力があるなら、今すぐに使いたかった。

《分かりました。では、行きましょう。私に合わせてレースのようにスタートしてください。On your mark》

「あ、ああ」

フェイトが戦っている方向に向け、スタートの体勢を取る。

《Set》

「フェイト…今行く!」

パン！！

ピストルの号砲のような音が鳴り、高井はそれに合わせて走り出す。その瞬間、高井の目の前には白色の魔法陣が現れ、高井はそれに飛び込む。その魔法陣を潜ったとき、高井が着ていた陸上部のジャージによく似たランニングジャケット、そして足首まで届く黒のランニングタイツ。高井が普段から走るときのような格好とあまり変わらなかったが、これが『魔導師』高井 翔一が思い描いた『バリアジャケット』であった。

高井はその勢いのままフェイトの方に走る。高井はそのときに魔法の力を体感する。

「速っ！これならすぐ着くぞ」

《今の主は魔力で肉体強化をしていますので、普段から走っている主なら周りは正に止まって見えますよ》

「そっか、ところでお前の名前は？」

《私の名前は何でしたっけ？》

「…悪かったな。飛ばすぞ」

魔法の力に改めて驚かされた高井はアルフの姿を確認できた。

「オレに任せてくれ」

アルフに一言を残し、そのままフェイトの元へ行くとバルディッシュが落ちていたことに気づく。高井はバルディッシュをすぐに拾い、そして、

「フェイトオオオ！！！！」

今、力尽きようとしたフェイトを救うためにバルディッシュを振るい、フェイトを拘束していたツタから引き離し、フェイトを抱えながらアルフの元へと走る。フェイトにバルディッシュを返し、アルフに預けて、高井は目の前にある木獣を見据え、こう言った。

「あいつと、戦う」

初めて戦う。その不安な気持ちをデバイスとなったシューズに喋りかける。

「オレをサポートしてくれ」スピードスパイダー」

陸上を始める前からいろんなシューズを履いてきた高井だったが、その中でも最高のシューズがこのスピードスパイダー。唯一、自分と共に走ってきた相棒が目の前にある怪物と今、戦う。

「さて、第二ラウンドの開始だ」

ついに目覚めた、己の魔力に。自分もなってしまった、魔法を操る者、魔導師に。

高井はかつてない緊張感、恐怖を感じながら目の前にある ジュエルシードの力のおかげで、巨大な敵を前に、立つ。

「スパイダー、今この状況で出来ることは？」

《今の主は魔力量が高くても、今は出来ても魔力による肉体強化のみです。従って、あれを倒せる手段は限られています》

自分の魔力量がどれほどのものかは知らない、そして魔導師とし

てまだ初心者な自分にスパイダーはある方法を教える。それは。

《相手を攪乱して、隙を突いて攻撃をしてください》

「それが今オレが出来ることか」《はい》

「分かった。スパイダー、フォローを頼む」

《了解》

高井はスパイダーを蹴りだし、木獣に向かって走り出した。高井に反応した木獣はツタを鞭のようにしならせ、振り回し応戦しようとする。が。

「フッ！」

振りの早い蹴りによりツタは斬られ、斬られたツタの先は地面に落ち、空振りに終わる。

「どうしたんだよ？」

右手を相手に向けて「こっちへ来い」という意志を手招きで示す。この意味が通じるかどうかは分からなかった。ただ、高井はそうしなくなっていた。

「！」

「っ！」

相手が挑発に乗ってきたのかどうかは知らない。木獣はツタの数を増やし、高井に一齐攻撃を仕掛けた。突き、払い、地面からの突き上げ、上からの叩きつけ。それらの攻撃が全て高井に襲いかかる。目まぐるしく襲いかかるその攻撃はとも避けられるものではない。それをフェイトとアルフは高井の身を案じながら見つめていた。目まぐるしい攻撃が終わると、土埃が消えだんだんとあらわになって

いく。そこにいたはずの高井の姿はなかった。

「翔一！」

「呼んだか？」

「！？」

フェイトが叫ぶと、何故かそばには今の攻撃でやられたと思っていたはずの高井がいた。これにはアルフも驚いていた。

「アンタ、なんでここにいるのさ」

「最初の二、三撃あたりから、後ろにちょっと退いたはずが勢い余ってそのまま猛スピードである木にぶつかってさ。で、そのまま2人と一緒にあいつの攻撃を見物してました。以上」

高井が指す先には高井の今言った「勢い余ってそのまま猛スピード」でぶつかって、まるでトラックにでもぶつかったような、へし折れた木があった。アルフはそれを見て啞然とし、フェイトは初めに魔法使った頃の時を思い出していた。あの頃は自分も飛行魔法の練習中に勢い余って草木に突っ込んでしまい、当時の使い魔に心配されていたことを。

「だ、大丈夫なの？」

「多少、背中が痛いけど動ける分には問題ないよ。バリアジャケットって凄いいんだな。あんな衝撃でも耐えられるなんて驚きだよ」

初めて着たバリアジャケットに高井は感心していた。走るときに格好に近い服が衝撃に対してかなり強く、高井からしてみれば全身エアバッグで守られているようなものだと感じていた。それでいて、試合用のユニフォームのような軽さ。それが高井のバリアジャケットに対する感想だった。



《主、下がりすぎです。いくら主のスピードがあつてカンが鋭いとはいえあれはやり過ぎです》

「悪い。まだ慣れないんだ。さて、仕切り直しと行くか」

再び、高井は目の前の敵を見据えて歩き出していった。

「アルフ…」

「どうしたんだいフェイト」

「さつき翔一が言つてたことだけど、後ろに下がった所、見えた？」

「…全然だよ」

「アルフもなんだ…」

フェイトは今まで魔法の訓練でフェイトよりも速い物もなく、見えない物も存在しなかった。少なからず、フェイトには自分のスピードには自信を持っていた。

しかし、木獣に立ち向かつている少年はその自分以上と言ってもいい速度で後ろに退いたのだ。そのまま勢い余つて木にぶつかったと言うが、一体どれほどのスピードで退いたらあんな折れ方をするのか分からなかった。

ひよつとしたら…。

一瞬だけ高井に対する期待感を持ったが昨日まで魔法を知らない高井がいきなりうまくやれるかどうか分からなかった。フェイトはこうしてはいられないと思い、立ち上がった。

「フェイト？もう少し休んだら」

「大丈夫だよ。バルディッシュ、行ける？」

《私はいつでも》

「それじゃあ、行くよ、バルディッシュ」

《次はこちらの番ですよ、主》

「そうだな」

木獣は高井に気付き、その巨体を高井の方に向ける。

「さて、次はこっちから行くぞ」

その瞬間、木獣の巨体が揺れ動き、木の葉が舞い散り、落ちる。

その原因は木獣の目の前にいたが、木獣は何が起きたのかさっぱりだった。

《素晴らしい。そのままボコボコにしてください。》

「ああ」

高井はさきほどの発言が言い終わってすぐに助走し、魔力を纏った飛び蹴りを木獣にぶつけていた。しかし、木獣はその助走の段階から全く高井を認識出来ず、なにが起きたのか認識できなかった。そして、高井は地面に着地し、その勢いのまま木獣に飛びかかり、ひたすら動き、殴り、蹴った。一力所だけに留まらず木獣では確認できない速さで攪乱していく。そんな中でも木獣の攻撃はするが空を切るばかりだった。高井と木獣の間に流れる時間がまるで違うように、木獣がツタを振るう前に高井は既に回避の動作を行っているため当たるはずがなかった。

これにより好守は逆転したが、高井が攻撃を加えなくなっただけであまり変わらなかった。

「ほらほら、こっちだよ」

ツタの数を増やし、高井に襲いかかる。今度は捕らえようとするが捌かれてしまう。

だが、ツタの数が多く捌ききれなかったのも事実。左腕に絡み付き、今までのような高速移動が出来なくなった。しかし、

「ふんっ」

ブチッ。

魔力を開放させ、いとも簡単に引きちぎってしまう。拘束も高井には通用しなかった。

「アルフのバインドの方がまだ外しづらかったぞ」

《主を縛り付けるなんて、私がいる限りは不可能です》

高井のデバイス、スピードスパイダーは高井が履いていたランニングシューズがインテリジェントデバイスとして生まれ変わった姿である。スピードスパイダーは高井の特性と身体能力、走った距離とそれまでに培われた戦いの経験を元にしてフィードバックし、高井自身を強くさせる。今日初めて魔法を使って戦う高井に戦いの経験は無いに等しい。今、高井が戦えているのはあくまでデバイスのスピードスパイダーのサポートがあつてこそそのもの。しかし、それでもこの高井の回避能力、機動力、スピード、持久力はいずれも他の魔導師には真似が出来ないものを持っている。回避能力はカンが鋭いということもあるが、機動力、スピード、持久力、それらの基礎は陸上を始める前からしている走り込み等で鍛えられた強靱な足

腰から来ているのである。

陸上を始める前までは色々な運動を経験し、その基礎となる走り込みプラスそのスポーツにある様々な動き。

そして、高井には誰にも負けない天性のスピードを持っており、こればかりは一番真似のしようがない。

それら、高井の中にある物が今、デバイスのスピードスパイダーを介して魔法として活かされ高井に働きかける。

その小さく細かい機動力に目に見えないスピードが加われば、もはや瞬間移動をしたようなもの。そして、それを長時間続けるだけの持久力を高井は持っている。

しかしそれでも魔導師としての経験が無く、魔法が使えない高井は自身の魔力で強化した身体を駆使し、速いスピードを得た代わり到这里ぞという時の攻撃がないのである。フェイトと違って決め手がないのも事実であり、たまに強い攻撃を加えても、ひるむだけですぐに打ち返してくる。

「すげえ固いな……。やっぱりさっきのフェイトみたいには上手くないな」

《純粹なパワーでは主の方が上ですが、ヤツも周りの木を吸収して強化されています》

「とんでもないな……」

しかし、高井はそれでも戦う。目の前にいる敵はフェイトが集めている物、ジュエルシードの力で進化した木の怪物。この怪物から勝たなければ、フェイトは目的が果たせなくなる。更に、先ほど高井が助けなければフェイトの身がどうなっていたか分からなかった。そうになると、高井は自分のいる世界に帰れる可能性が潰えることもあった。

そして、何よりも、自分よりも年下の少女が果たさなきゃいけない

使命のために怪物と命を賭けて戦い、命が危険にさらされても立ち向かっていた。少女を救いたいと思ったその時に自分も力を持ち、少女を助け出したと同時に、自分も戦うことになった。

力を持った自分の目の前にいる敵は、乗り越えるべき「壁」だ。自分も、フェイトも、ここから進むためには「壁」を壊さなければならぬ。

「フェイトは、あんな小さい体で頑張ってたんだよね…」

《主…？》

「どれだけ魔法の才能があつたって、結局はただの女の子だった…。それでも、あんなに頑張つて…、あんなのと戦つて、よく挫けないもんだ」

高井は木獣の攻撃を回避し、さばきながら、何かを見るように言う。

「…オレは、フェイトみたいな魔法が使えるわけじゃない。空だって飛べない。ただ、走り回って殴って蹴るだけだ。正直言つて、倒せないかもしれない…」

《…確かに、今の主には厳しいでしょう》

「けど、それでもフェイトもアルフもオレもこんな所で止まるわけにはいかない。そのためには」

高井は隙を見つけ、木獣の懷に飛び込もうとする。そうはさせまいと木獣は応戦するが高井のスピードには追いつけず侵入を許してしまう。そして、高井の魔力色であるう白色の光が高井の右足に纏う。

「まずは、その『壁』を壊す…！」

走りながらジャンプし、その右足を回し蹴りの要領で木獣を蹴り飛ばす。木獣は宙に浮き、後ろへ飛ばされる。木獣が倒れ込むと、森の中が騒がしくなり、振動する。

《それは仮面ライダーガタックのライダーキックですね》  
「よくそんなこと知ってるな、お前…」

スパイダーのムダ知識に苦笑いする高井だった。

《ふふ。私はあなたのデバイスですから。それよりも主、ヤツがまだ立ってきました》  
「…ああ」

よく見ると、弱々しくはあるが、木獣はまだ立ち上がろうとしていた。それを見て、自らのパワー不足を嘆いた。

「ちっ、またやるか？」  
(翔一、後は任せて)  
「フェイト！？もう大丈夫なのか？それにこれは…？」

頭の中にフェイトの声が聞こえていた翔一は少し戸惑っていた。

(これは念話。それよりも今から広域魔法を打ち込むから翔一は下がって！)  
「ああ、分かった」

フェイトから念話で指示を受けた高井は念話のことは後で聞くことにし、後ろに下がった。

「よし、いいぞ！」

《Thunder Rage》

バルディッシュがサンダーレイジを打ち込む準備が出来た。それを確認したフェイトは木獣に目標に定めた。

「サンダー…レイジー…！」

バルディッシュの先端から金色の魔力光が発射され、その一筋の光が木獣に向かう。木獣は反応が出来ず、それをまともに受けてしまった。

そして、木獣からジュエルシードが飛び出て、それを確認したフェイトはすぐにジュエルシードのもとに向かい、封印した。

「ふう…。やったよ！アルフ、翔一！」

すぐに後ろからアルフと高井が駆けつけてきた。

「フェイト、やったね！」

「うん！翔一もありがとう…！」

「ああ、どういたしまして」

フェイトの笑顔に高井も笑顔で応える。

《主、お疲れ様でした。初めての戦いでよくできました》  
「スパイダーのサポートがあつてこそだよ。ありがとう」

高井は自分のシューズ、今はデバイスとなった相棒と互いに労った。

「スパイダー？それが翔一のデバイスなの？」

「ああ、そうなんだよ」

高井は、二人にシューズを見せるように片足を上げた。

《初めまして、私はスピードスパイダーと申します。これからよろしく願います。フェイトさんにアルフさん。そして、バルディッシュ》

「うん、こちらこそよろしく」

「あたしもね」

《…》

何も言わないバルディッシュにフェイトは不審に思う。バルディッシュは普段は無口だが、相手に挨拶を交わさないほど無礼なデバイスではない。

「バルディッシュ…？」

《…こちらこそ。私は負けませんよ、スピードスパイダー》

《…私もです、バルディッシュ》

デバイス同士、ライバル意識を持っていた。

「お前ら…」

「ははは…」

これには二人とも思わず苦笑いするしかなかった。まさか自分の



デバイスが他のデバイスにライバル意識を持つとは思っても寄らなかった。しかしスピードスパイダーとバルディッシュはスピードを重視したデバイス。意識してしまうのは当然なのだろう。

「まあ、よろしくな。それとフェイト、お願いがあるんだ」  
「お願い？」

「…オレにも、ジュエルシード集めを手伝わせてくれないか」  
「!？」

高井の申し出にフェイトとアルフは驚いた。

「翔一！ 何言ってたんだ、アンタは！」  
「そうだよ！翔一だって見たでしょ！」  
「見たよ。だからこそだよ」

この申し出にはありがたいがジュエルシードの危険性を目の前にした高井が何故協力を申し出るのか分からない二人。

高井は話を続ける。

「ジュエルシードを集めていくとあんなのが何回か出てくる可能性もあるんじゃないのか？ だったら、人手がいるじゃないか。オレだって二人の手伝いをしたいんだ」

「でも…」  
「頼む」

高井は頭を下げ、二人に許可を求めた。しばらく考え込む二人。フェイトが口を開く。

「…一つだけ、約束してくれる？」  
「約束？」

「決して、ムチャはしないって約束してくれる？」

そう言ったフェイトは真剣な眼差しで高井を見ている。高井はフェイトに応えるように高井もフェイトを見る。

「ああ、約束する」

約束してくれた高井にフェイトは微笑み、「ありがとう」とつぶやいた。

「なんか悪いね。ジュエルシードはくれるし、ご飯まで作ってくれる、そして今度はジュエルシードを探す手伝いをしてくれるなんて…。アタシからも礼を言うよ」

「どうして、翔一はわたし達の為にそんなにしてくれるの？」

「どうしてかなあ…」

そう言われると高井もどうやっていいか分からなかった。ただ、こういう思いだった。

「ただ、ほつとけないから。それだけ」

「それ、だけ？」

「うん、それだけ。…これじゃあ、ダメだったかな」

その答えに腑に落ちない感じがしたが、高井の答えに二人は「そうなのか」と思うようにした。

「さて、帰るか。スパイダー、戻してくれ」

《はい》

バリアジャケットを解除し、陸上部のジャージ姿になり、フェイトも普段の格好に変わる。空の色はいつの間にか夕焼けに染まって

いた。それは見事なコントラストで三人はそれ見て「綺麗だ」と思った。

「あつ…翔一、もう一つだけ約束してくれる？」

「ん？まだあるのか？」

「…ベランダを使うときはちゃんと行ってね」

「わ、分かった」

フェイトのかすかに含まれた怒気に圧されつつも高井は応答し、フェイトの顔から怒りが消えた。

「翔一」

「なんだよ、フェイト？」

「…ううん、なんでもないよ。ただ…」

「ただ？」

「呼んでみただけ」

「なんだそりゃ」

ただ、フェイトは本当に高井の名前を呼びたかった。それだけだった。そのそれだけの行為が、フェイトにとっては大きな意味を持つ。

「さて、今日はどうすつかなあ…。今日は派手に動いたからなあ…」

高井が今日の晩御飯のメニューを考えながら歩いているとフェイトも高井の傍に行き、同じ速さで行く。そして、アルフはその二人の後ろについて行く。

こうして「壁」を一つ破り、その道を歩いていく。また新しい「

壁」がそびえるだろう。しかし、今この時はただ、帰るべき場所へ  
帰るだけだった。

## 第五話（後書き）

ハイジ「スピードスパイダーと翔一のデビュー戦でしたが、いかがでしたでしょうか」

高井「緊張したよ。攻撃は当てても効かないし、どうしようかと思っ  
たよ」

ハイジ「一応、ライダーキックやったじゃん。ガタツクの」

高井「あれで分かるか…？」

ハイジ「うーん、それは分かん」

高井「おい、こら」

ハイジ「それでは、また」

## デバイス（前書き）

この項目はキャラ紹介同様に更新していきます。

## デバイス

スピードスパイダー

装着者

高井 翔一

シューズカラー

黒×金×赤

イメージＣＶ

田中 秀幸

高井 翔一が陸上の練習で履いているランニングシューズ、スピードスパイダーがデバイスとなった物。外見は市販されている物と変わらないが、起動時には翔一の持つ魔力で肉体強化させ、翔一の長所であるスピードを特化させる。また、翔一の今までの走り込み、今までしてきたスポーツの様々な動きも翔一の魔導師としての力となり、高い運動性と持久力を確保している。また、デバイスがシューズということで、高速移動はもちろん高度のハイジャンプ、水の上でのホバー、強力な蹴り技も可能となっている。スピードスパイダーのデバイスのコアはシューズの中にあり、チップ状のクリスタルが埋め込まれている。これは脱着可能である。

作者からの個人的な意見

このスピードスパイダーはリアルなスポーツショップで売ってい

るのでランニングに関心がある方やどんなデザインのデバイスが興味がある方は実際に見てはいかがでしょうか。スピードスパイダーは本当にチップを埋め込む溝がありますが、それを説明すると長くなるので割愛します。

ちなみに、今年の秋に（2010年11月現在）スピードスパイダーの発展型が出ました。まあ、だからどうだって話ですよね。



## 第六話（前書き）

ハイジ「がああ！前回からかなり時間が経ってしまったよ、こんにちは！しょう！」

高井「いつも仕事終わってから走りに行って、帰ってから執筆だからね。よくやるよ」

ハイジ「遅くなりましたが、第六話をどうぞ」

## 第六話

「ふう……」

昨日の戦闘から一日経つても、高井は走ることは止めない。周りにはジョギングやウォーキング、学校帰りの学生が多かった。今日、高井が来ているのは遠見市と隣に位置する海鳴市の臨海公園に来ていた。昨日はインターバルのスピード練習をしたため、比較的スローペースで走る日だった。海鳴市まで来たのはジュエルシードの探索も兼ねての事だ。それは昨日誕生した『相棒』と共に。

《主、走ってきた所にはそれらしい反応はありませんでした》

「そつか……。ありがとう、スパイダー」

高井のデバイス、スピードスパイダーはジュエルシードが周辺に無いことを高井に告げた。

「フェイト達も大変だよな。こんなこと何回もやっていたわけだろ？」

《そうですね。バルディッシュとやりとりしていたのですが見つかる確率は低いそうです》

「そつか……。ん？お前らって仲悪くなかった？」

《負けたくはありませんが、主と共にいるフェイトさんのデバイスであり、仲間ですから》

「ふーん……」

《後は、主の魔法の練習メニューを作るために協力もしてくれていきますから》

「そんな事までしてくれたんだ」

《基本的な部分はいつもの練習でやればいいですが、魔法戦は違い

ますからね」

スピードスパイダーは高井のいつもの陸上の練習メニューと共に魔法の練習メニューを考えていた。ジュエルシード集めを手伝うと言った以上、昨日のように暴走した怪物が現れるかもしれない。その時の為に高井も魔法について学ぶ必要があるのであった。

「なあ、スパイダー」

《なんででしょうか？》

「なんでお前はオレのデバイスになったんだ？」

高井は昨日から思っていたスピードスパイダーを直に聞いてみた。

《…実を言うと、私もよく分からないのです》

「えっ？なんで？」

《いつの間にかこうなっていたのです。私は主からフェイトさんを助けたいという想いを感じて目覚めました。それまで私は眠っていたのか、デバイスとして生まれ変わっていなかったのか分かりません》「…この世界に来てから何か変わった、ってことでいいか？」  
《それでよいと思います》

スピードスパイダーにこれ以上聞いても何も聞けないと思った高井は上を見上げた。見上げた空は雲が少なく、晴れていた。

「まっ、お前のおかげでフェイトを助け出せたんだ。それだけでもオレはお前に感謝しているよ、スパイダー」

《ありがとございます》

「しかし、オレが魔法使いか。でもって、お前は魔法の靴か？これもこれで面白いな」

《夢があつていいでしょ？》

「そりや違いない」

スピードスパイダーに笑いながら話しかける高井だったが、あることを思い出した。それは県予選を勝ち抜いてから自分のシューズやスパイクにやたら触れる事が多くなった事だった。高井自身も何故そうするようになったのかは分からなかったが、そのシューズと共に走る事から、高井にとって、シューズやスパイクはただの『物』では無くなったのでは無いかと考える。高井はこのスピードスパイダーを初めて見たときから気に入っていき、このシューズでことん走り込みに行っていた。インターハイ出場が決まってから、練習前には履いたシューズに添えるように触れ、その日の練習をこなせるようにと願い、試合の時にはいい走りができるようにと願い、シューズに想いを託していた。最初は性能のいいシューズという感想だったが、今は共に戦う『相棒』だった。

そして、高井は魔法を操る魔法使い、いわば魔導師となり、いつもいる『相棒』であるスピードスパイダーは意志を持った魔法のシューズ、インテリジェントデバイスとなった。これにより、高井をサポートする真正正銘の『相棒』となったのである。

《主、そろそろ行きましょう》

「ああ、もう少し見て回るか」

周辺を少し走り回り次の場所へと向かおうとしたとき、叫び声が聞こえた。その方向を見ると、ひとりの小太りの男が何かの袋を自転車のカゴに入れて走っていた。別の方を見ると三人組の小学生ぐらいの女の子のうちの一人が何か言っていた。

「スパイダー、どうする？」

《とりあえず、あの男を追いましょう》

「ああ、そうだな」

高井は自転車の男を追い掛け、走っていると男は追ってくる高井に気付きスピードを上げた。しかし、それが高井の闘志に火を点けた結果となる。

高井はピッチを速め、自転車をあつという間に追いつく。その様を見た男は驚きを隠せなかった。男は全力で漕いでいるだろうが、本気になった高井のスピードから逃れられるはずがなかった。

「逃げるな！」

しかし、男は高井の怯えたように慌てて自転車を乗り捨て、袋を持って逃げ出す。

「ちっ！」

高井は男の後ろを追いかけるがすぐに追いつき、ひたすら煽る。

「さあ、どうします？オレはまだまだ行けますよ」

「な、なんなんだよ。お前、は…」

男は息も絶え絶えの状態で今にも倒れそうだったが、高井は素知らぬ顔で男を追いつめる。

「ただ走るのが好きな男ですが、何か？」

男は高井に煽られ続け、息を切らして遂には倒れ込んだ。

「あの子から何か盗ったんですか？」

「し、知らないっ」

「じゃあ、何で逃げるんだよ」

高井は袋を男から奪い取り、感触から体操服か何かが入っているのだろうと踏んだ。そして、その袋に付いてあったネームプレートに「高町　なのは」と書かれてあった。

「それは…！」

男はそれを奪い返そうとするが、高井はそうはさせまいとする。

「『高町　なのは』か。アンタの名前にしては可愛らしいですね。というか、明らかにあの子の物だよ」

袋を奪おうとする男は高井に殴りかかろうとするが、簡単にあしらわれる。

「たく…、アンタみたいな変態もいるんだな。あんな小さい子の持ち物を奪うなんて。これは返してもらってからな」

「や、やめろ！」

男は高井からまた奪おうとするが、軽く回避する。

「あんた、自分が何してんのか分かってるのか？立派な犯罪なんだけど」

「そ、そんなの知るかつ」

高井は溜息をつき、呆れたように男を睨む。殴ろうかと一瞬だけ頭によぎった。

しばらくすると警官が二人の元にやってきた。遅れてさっきの三人の女の子も来た。男は警官に抑えられ、そのまま後から来たパトカーに連れて行かれた。

「ご協力、感謝いたします」

「いえいえ、ではお願いします」

「くそっ！正義の味方気取りかよ！」

高井は口笛を吹く真似をしながらそっぽ向く。

そして、男はパトカーに乗せられ、それを見送った後は三人の方に向け、袋を差し出す。

「はい。これ、君のだろ」

「どうも、ありがとうございます」

高井は髪を二つに結いだ少女に袋を渡した。少女は高井に礼を言い、袋を受け取った。隣にいた金髪の少女が「良かったね、なのは」と言い、なのはと呼ばれた少女は「うん」と頷く。高井は彼女が「高町なのは」と考えた。

すると、もう一人の紫がかかった髪の長い少女が高井に話しかけてきた。

「あの、大丈夫でしたか？」

「ああ、大丈夫だよ。心配してくれてありがとう、じゃあね」

「あつ、待ってください」

立ち去ろうとする高井になのはが呼び止める。

「あの…名前を覚えていただけませんか？私は…」

「高町なのは、でしょ？」

何でこの人はわたしの名前を知っているの？そう言わんばかりの表情をしているなのはを見て高井はその理由を答えた。

「それに書いてあったから」  
「あつ……」

高井の指を指す先にはなのはが持っていた袋だった。

「オレは高井 翔一。よろしく、なのはちゃん」  
「はい。こちらこそ、翔一さん」  
「気を付けて帰れよ。またな」

再び走り出そうとする高井だったが、なのはに「待ってください」とまた呼び止められる。

「まだ、何かあるのか？」  
「あの……お礼がしたいんです。ウチへ来てくれませんか？」  
「お礼？ いや、そこまでしなくてもいいって」

高井にとってはそこまでの事をやったわけではないと思い、断ろうとするが、金髪の女の子が高井に言う。

「ねえ、せっかくこの子がお礼がしたいって言ってるんだからちゃんと受け取ってあげたらどう？」

「えーと、君は？」  
「あたしはアリサ・バニングス。なのはの友達よ。そして、この子は月村 すずか」

「月村 すずかです。よろしく、翔一さん」  
「ああ、よろしく。アリサちゃん、すずかちゃん」  
「うん、こちらこそ。それでどうするの？」  
「うーん……」



そこまでしてもらうのも悪いという気は変わらないが、今ここでなのはのお礼を断るのも悪いと考えた。高井は答えを出す。

「…それもそうだな。じゃあ、お言葉に甘えますか」

結局高井はなのはの申し出を受けることとなった。

「そうか。みんなは一年生のときから一緒だったんだ」

高井となのは達四人はなのはの両親が経営している喫茶店に行く途中、高井はなのは達のことを聞いていた。

「ええ、そうよ。もっとも最初の頃からこんなんじゃないけど」  
何があつたかはあえて聞かない高井だったが、いろんな事を経て今の関係になったと思うことにする。

「それにしても、何でなのはちゃんの体操着袋を奪ったんだろうね」  
「さあね。よく分からないわ」

高井は心の中で男が何故なのはの体操着袋を奪った理由を考えたが、それを言ってしまうのは本人のみならず、アリサとすずかでも嫌悪感しか感じないだろう。

「翔一は何か知らない？」

「オレが知るわけ…って、アリサちゃんはいきなりオレのこと呼び捨てか!？」

アリサの呼び捨てに思わず反応してしまう高井。フェイトにも呼び捨てで呼ばれてはいるが、アリサの場合は明らかにフェイトのは違っている。

「あら、いけなかった？」

「いやだつてオレ、15なんだけど…。まさかいきなり年下の子から『翔一』と呼ばれるとは…」

アリサは何故高井のことを『翔一』と呼ぶのか、答えた。

「なんかね…、翔一は背は高いけどあまり年上って感じがしないのよね」

高井はそれを聞いた瞬間、うなだれた。「オレは小学生の女の子に呼び捨てにされるほどオレには年上のオーラは無いのか？まさかフェイトがオレのことを呼び捨てするのはそのためなのか？」と心の中で考えた。そんな高井にさらに追い討ちをかける。

「にやはは…。アリサちゃん、それは翔一君がかわいそうだよ」

なのはに君付けで呼ばれた高井は更にへこんだ。

「あの…翔一さん、元気出してくださいね」

「ああ、ありがとな。すずかちゃん」

唯一自分のことを年上として見てくれるすずかのおかげで立ち直る高井だった。

「男ならぐずぐずしない！早く行くわよ、翔一！」

高井は、年上の威厳が失われていくのを感じながらまた歩くのだ

った。

しばらく歩くと、ようやく目的の場所に着いた。

「ここか？」

なのは達三人と一緒に来たのはなのはの両親が経営していると言われている『翠屋』という喫茶店だった。

「うん、わたしのお父さんとお母さんが働いているの」

なのはが店の扉を開け、それにアリサ、すずか、高井が続く。なのはが元気良く「ただいまー」と言うと厨房から一人の女性が現れた。

「お帰りなさい、なのは。あら、アリサちゃんにすずかちゃんもいらっしやい」

『こんにちはー』

二人は声を揃えて女性に挨拶する。高井も軽く会釈する。腰まで届く長い髪に、物腰柔らかそうな雰囲気。高井はその女性を見て「綺麗な人だな」と思った。

「どうも、初めまして」

「あら、あなたは？」

女性は初めて見る高井になのはが説明する。

「お母さん、今日体操着袋盗られちゃったんだ」

「えっ…？」

「でも、ここにいる翔一君がすぐに取り返してくれたの」

「あらあら、そうだったの。わざわざありがとございます」

「いやいや、何もそこまでしなくともいいですよ」

目の前の美人に頭を下げられ戸惑う高井だった。さらに奥から一人の男性もやってきた。

「なのはおかえり。アリサちゃんもすずかちゃんもよく来たね」

その男性は高井よりも背が高く、整った顔立ちに優しい雰囲気醸し出していた。同性の高井から見てもかっこいいと思わせるものだった。

「ん？君は見ない顔だね」

「お父さん、実はね…」

なのはが先程と同じ様な説明をする。男性は高井を感心しながら見ていた。

「そうか。君みたいな子がいてくれて良かったよ。ありがとう」

「そんな…。でも、そう言っていただけだと嬉しいです」

高井自身も自分のやったことに自覚が無いわけではない。ただ、照れくさかった。それだけである。

「自己紹介が遅れたね。私はこの子の父親の高町 士郎。で、これが妻の桃子」

「よろしくね」

高町夫妻が名乗るとき、桃子が微笑んだときに少しだけ心臓がドクンと動いた。同時に「士郎さんみたいな人だからこそ桃子さんみたいな人と結婚できるのかな…」と考えながらも高井も自分の名前も

名乗る。

「僕は高井 翔一です。 よろしく願いします」

「よろしくね。 翔一君」

「翔一君、せっかくだ。 お礼と言っでは何だが何か食べていけないか？ お代はいただかないよ」「そこまでしてくれるとは…。 それじやあ、ご馳走になります」

「そうか、じゃあこっちで待っていてくれないかな」

四人は案内された席に付き、注文をする。 頼んだ物が来るその間までさつきまでの話の続きをする。

「あの時の翔一君、凄い速かったよね。 あっという間に自転車に追いつくんだから」

「あたしもびつくりしたわ。 翔一って、何かスポーツしているの？ 今まさにそんな格好してるけど」

アリサが言うように高井の今の格好は陸上部のジャージではないが、この世界で買った紺色を基調としたランニングジャージを着ている。

「ああ。 小さい頃からいろんなスポーツしていたけど、今は陸上の中距離走をやってるよ」

「中距離？」

「あの、短距離とかマラソンじゃなくて、ですか？」

「マラソンはオレ達の歳ではまだやらないし、短距離はあまり得意じゃないんだ。 それでも100m 11秒フラットで走るけど」

「11秒！？ メチャクチャ速いじゃない！」

「うそ…」

アリサとすずかは高井のタイムに驚きを隠せず、なのはは「わたしの50mより速い…」と呟いている。

「そんなに速いとあの男がちょっとだけ哀れに思えてくるわ。あなたに狙われたらひとたまりも無いじゃない」

高井はその時の瞬間を思い出す。自分の姿を見て慌てるように逃げ出す男の姿はどこか滑稽だった。「でも、短距離が得意じゃないなら翔一君は何が得意なの？」

なのはの質問に「800と1500だよ」と答え、テーブルに置いてあった水を口に含む。

高井が答えた二つの種目は地区予選で走っていた種目で中距離に部類される種目だった。高井はスピードはあるが瞬発力が短距離選手より劣る。しかし、全力に近いスピードを維持して走れて、後半からのスピードの伸びを注目され監督から中距離選手としての資質を見出された。

「800と1500…どっちも長いね」

しかし、小学生であるなのは達からすればどっちも長距離だった。

「そういえば、なのは今日の50m走、ダントツだったわね」

「アリサちゃん言わないで」

「なのはちゃんって、そんなに足が速いのか？」

「違うわよ。逆よ、逆」

高井はそれを聞いてそういう意味かと思う。なのはは「うう…」と涙ぐんでいた。

「なのはちゃん、翔一さんに足が速くなる方法教えてもらったら？」

「本当にそうしうかな…？」

「ちよっと、オレは人を教えるなんてまだ無理なんだけど…」

なのはが高井に教えを乞おうとするがそんなのは見て高井は苦笑いする。

「はい、おまちどおさま」

「あつ、来た来た」

四人の頼んだ物を桃子が持ってきてくれた。それを受け取り、舌鼓を打つ。高井はシュークリームを頼んだが、今まで食べたシュークリームの中で一番美味しいと感じた。

「このシュークリーム、美味しいな…」

「うちのお店はそのシュークリームとケーキ、自家焙煎コーヒーが自慢なんだよ」

「そうなのか。このシュークリームをなのはちゃんのお母さんが作っているのか」

「うん。とても綺麗で優しいお母さんなんだ」

「だろうな」と思う高井だった。

そして、時間も過ぎていき、アリサとすずかも「もう帰らなくちゃ」と言い、高井も帰ることにした。

「今日はどうもご馳走してもらい、ありがとうございました」

「また来ることがあれば、いつでも来てくれよ」

「はい、それではまた」

一礼し、遠見市に戻るために足をそちらに向け、走り出す。後ろから「翔一君またねー！」と声がした。後ろを向くとなのは、すずか、アリサが手を振っていた。

「ああ、またな！」

高井はそれに応えるように大きく手を振り、そのまま走り去った。なのは達は高井の姿が見えなくなるまで見届けた。

《主》

「なんだよ、スパイダー」

遠見市に入りかけたときに今まで喋らなかったスピードスパイダーが喋りかける。

《あの少女、高町　なのはから魔力を感じました》  
「何？」

高井は思わず立ち止まりそうになったがスピードスパイダーからそのまま走りながら聞いてくださいと言われ、走りながらスピードスパイダーの話を聞く。

《まだ力には目覚めていないようですが》

「前のオレみたいなものか。…なあ、スパイダー」

《なんででしょうか？》

「フェイトとあの子達、友達になれそうかな？」

《…それは分かりません。ですが、高町　なのはとアリサ・バニングス、月村　すすかは良い人物だと私は思います》

「そっか。どこかで機会があれば会わせてみるか」



高井はフェイトになのは達を紹介してみようかと考えながら、走るのだった。

夕飯を食べ終わり、食器を洗っている時に高井はフェイトにあることを聞いた。

「フェイト、一つ聞いていいか？」

「何かな？」

フェイトは高井が洗った物を拭きながら、話を聞く。

「オレってさ…年上に見えたりする？」

「えっ？でも実際に翔一はわたしより…」

「そうじゃなくて、雰囲気年上に見えたりするかな、て聞いたんだよ」

「うーん…」

高井はフェイトが手を止めて何かを考え込んでいる様子を見て、嫌な予感がよぎる。

「…ごめん、あまり年上という気がしなかったかも」

「あ…そ…」

高井はフェイトの答えに何も言えなかった。結局自分はどこかそういうの年上を感じさせる何かが無いと思い、高井はかなりへこんだのであった。

## 第六話（後書き）

ハイジ「今回は魔…じゃなかった。本家主人公である高町　なのはさんと友人、ご両親の登場という話でした。　自分で見返すとかナリグダグダ感が否めない…」

高井「なら精進するんだな。　ところでさ、作者さんはジョグの時は（普通の走り込み）大体この小説のネタを考えているよね。それはどうなの？」

ハイジ「ああ。ネタとしては三つぐらい思いついたんだ。それをいつ使い、どう使うかは言えないけどな」

高井「ふーん」

ハイジ「小説オリジナルの味方と敵、デバイスも考えているからね」

高井「どんなのが来るんだろ…」

ハイジ「さて、次回は一週間後、無限大に更新します」

高井「長えよ！！ちゃんと更新しろよ、なあ！？」

ハイジ「それでは、また」

## 第七話（前書き）

ハイジ「二週間以上空いたな…」

高井「半月も空けるなんて…あんまりすぎないか？」

ハイジ「まさか、ミスで話の大半を消してしまうとは思ひもしなかった…」

高井「気を付けないといかんぞ」

ハイジ「今回はそのおかげでかなりやつついで、粗さ二割り増しになつてると思われますが、ではどうぞ」

## 第七話

朝からフェイト達と別れ、ジュエルシードの探索を始めていたが、ここまで見つかりにくいと、高井はこの作業の難易度を思い知らされた。

「ジュエルシード探して、この間から思っていたけどすごい苦勞するな…」

いつもの様にジョグをしながらジュエルシードを探しているが、朝から走りっぱなしな為、少し疲れ始めていた。時間はもう昼を少し過ぎていて、よく走ったなあと思ふ。探し始めたときは朝日がわずかに出ていたが、今では自分の頭上に太陽の光が降り注いでいる。春の陽光とは正にこのことだろうか。

去年の春頃に、家族の旅行がてらに全国高校駅伝の全区間を父親と一緒に走った記憶がある。ここまで長時間を走ったのは今日で二度目だった。

「なあ、スパイダー」

《何でしょうか？》

「ジュエルシードは願いを叶えるって言うけど、あれをフェイトに集めさせている人は何をする気なんだろうな」

《そこまでは…。ただ、一個だけでもあれだけの力を持っていることは分かります》

たった一個のジュエルシードで異世界に転移させ、以前にも木の怪物を発生させたりと高井の中では脅威の物質となりつつあった。

「願い事があつたら大抵は一個で願う気がするんだけどな…。どん

な願いで複数も必要になるのかな」

《…例えば、世界征服とか》

そんなばかな、と高井は思うが否定はできなかった。ジュエルシードの説明はフェイトから以前に聞いたことがある。全て21個あり、ナンバーが振り分けされている。今現在あるジュエルシードは二つ。残り19個。この間のことを考えるとかなりハードだろう。しかし、フェイト達に協力をすると言った手前、投げ出すことなど出来るわけがない。それに元の世界に帰るための手掛かりもそこにあるのかもしれない。その望みを賭けて高井はフェイト達にジュエルシード探しを手伝っている。しかし、その一方でフェイトにジュエルシード探しをさせている人間が気になっているのも事実だった。フェイトはその人は研究のために忙しいので自分が全てのジュエルシードを探していると言うが何の研究かまではフェイトも知らないらしい。

フェイトを見知らぬ世界にジュエルシードを全て集めさせるようにと行かせて、それを研究に使う。研究の目的をフェイトに知らせない。

その事から高井はその人物にあまり良い印象は持っていなかった。

「しかし、腹減ったなあ。二人には弁当を渡したけど、オレはどこで飯食べようかな…」

《主、翠屋はいかがですか？》

「翠屋？…この辺りは海鳴市だったかな。そうするか」

スピードスパイダーは喫茶『翠屋』の名を挙げる。高井もそれに賛同し、翠屋に向かう。走って数分で目的の場所に着き、店の扉を開けると「いらっしやいませ」と優しい声が高井の耳に触れる。

「あら、翔一君。いらっしやい」

「こんにちは、桃子さん」桃子に軽く会釈し、高井はカウンター席に座り、置いてあったメニューに目を向ける。適当に目を通し、頼む物を決めた。

「ふふ、よく来てくれたね。ご注文は？」

「カレーとオレンジジュースでお願いします」

「はい。少々お待ちを」

そう言うと、桃子は厨房へと行き、高井は店内を見回す。以前来たときはあまり見ていなかったが店内はとて広く、優しい光で満ちていた。

「よく来たね、翔一君」

「どうも、お邪魔してます」

奥から士郎が高井の元へ来て水を入れ、高井に差し出した。

「その格好からして、走ってきたのかい？」

「そうです。すいません、二度もこんな格好で来てしまつて」

「いや、君ならいつでも歓迎するよ」

「ありがとうございます」と頭を軽く下げるのを見て、士郎が微笑む。

「そういえば、君はどこに住んでいるんだい？この間は聞けず終いだつたが」

「今は…遠見市です」

「ふむふむ。歳はいくつなのかな？」

士郎の質問は続き、答えられる範囲で答えようとする。

「15です。今年で16になりますが」

「ほう、ウチの娘の一つ下か」

「ウチの娘？なのはちゃんその他にいますか？」

「美由希と言つてね風芽丘学園に通っているんだ。後は息子の恭也、大学生だ。三人の子供だ。」

翔一君はどこの学校に通っているんだ？」

「いえ、僕は…」

ここに自分の学校は存在しない。それゆえ高井が答えられるのはこれだ。

「僕は…高校に行つてません。今は働いています」

「高校に行つていない？何か理由があるのか？」

「ええ、経済的な理由で…」

「そつだったのか…。それは悪いことを聞いたな」

「いえ、大丈夫ですよ」

それでも一応押し通せるんだな、と高井は思い、安堵する。

「走っているのは、昔陸上部だったから？」

「いえ、田舎の学校だったので部は男子でバレーボール、女子は卓球だけなんです。そして、希望する人間がいれば冬はスキーをやるんです。陸上はバレーや卓球のついでみたいな感じなんですよ。」

僕はバレー、陸上、スキーをやっていましたけど、走るのが好きなので今は陸上だけですな」

「まあ、今でも走っているぐらいだからな」

「はい」

笑顔で応え、士郎もつられて微笑む。

「翔一君、出来たわよ」桃子がカレーライスとサラダ、オレンジジュースに乗せたトレーを高井の前に持ってきてくれた。

「あつ、ありがとうございます。あれ、卵まで付いてる」

「これはサービスよ。では、ごゆっくり」

桃子は高井に微笑み、そのまま厨房へと消えていった。高井はそんな桃子を見ていた。

「どうだ、翔一君？」

士郎に声を掛けられ、現実に戻った高井は何がどうなのか分からなかったが士郎の表情と今の出来事を照らし合わせ一つの答えが出る。

「桃子さんってすごい綺麗な人ですね」

「翔一君も分かるか！」

テンションが高くなった士郎に驚く高井。そして、士郎はそんな高井をよそに自分の妻について語る。

「そうなんだよ、あんなに綺麗な人はなかなかいないと私は思うんだよ！ 翔一君も結婚するならああいう人とするべきだぞ！」

「は、はあ……」

士郎の言っていることは分からないでもなかった。しかし、この士郎のテンションについていけず、ただ頷くしかなかった。

「あなたっ」

厨房にいる桃子から士郎をたしなめる声がした。



「おつとすまん。工作中だった。翔一君、何かあれば呼んでくれ」  
「分かりました。いただきます」

士郎から解放された高井はカレーライスを頂くことにした。

「ただいまあ」

まるで自分の家のような感覚で店内に入ってきたのは高井と同じ  
歳くらいの眼鏡をかけた少女だった。少女は高井と一つ席を空け  
て座り、そこに桃子がやってくる。

「お帰り、美由希」

「ただいま、母さん」

桃子が「美由希」と呼んだので彼女が先程士郎が言っていたもう  
一人の娘である高町 美由希と分かる。

「美由希、この子が翔一君よ」

「えっ、そうなの？」

こちらを見たため、高井もカレーを食べていた手を止めて美由希  
の方を見る。

「初めまして、高井 翔一です」

「高町 美由希です、よろしく」

軽く会釈し、美由希は自分の食べようとするスイーツとコーヒー  
を桃子に頼む。

「君がなのは言ってた人なんだあ…へえ」

さも興味津々な目で高井を見る美由希。何を思っているのか高井には分からなかった。美由希からしてみれば妹であるのはから聞いた話の少年がどんなものなのか知りたくもなる。

「なのはちゃん、僕のことでは何か言っていました？」

そんな美由希に対して高井はどんな事をなのはから聞かされたが、聞いてみる。

「えーとね、背が高く足が速い、優しくてかつこいい人だって言うてたよ」

美由希から聞いた高井に対するなのはのイメージはプラスばかりだった。

「ほとんどべた褒めじゃないですか、それ」

「ううん、私も翔一君を見てそう思ったよ。優しそうな人だって。

でも、私はどちらかと言うと『かつこいい』と言うより、『可愛い』かな？」

「か、可愛いっ、ですか？」

美由希に可愛いと言われる高井だったが、男である高井が可愛いと言われるのは少々複雑だった。

「…このオレ…高井 翔一が…可愛い…だと…」

否、かなり落ち込んでいた。

その後も、美由希からの質問攻めが続くのであった…。

「…この辺りだったと思うんだけど」

探査魔法を掛けてジュエルシードの位置の近くまで来たが、正確な位置までは分からなかった。そこからは地道に探す以外に他なかった。今は相棒のアルフと協力者の高井とは別々にジュエルシードの探索を行っている。フェイトとしては高井を一人で行かせず、アルフについて行かせたかった。高井はまだ魔導師に成り立てで万が一、何かあるとまずいと思ったから。だが、高井がそれを断り高井のデバイスであるスピードスパイダーがサポートするという形で単独行動となった。しかし

《心配ですか？》

「バルディッシュ？」

あまり喋らないバルディッシュがフェイトの心を読んだようにバルディッシュが喋りかける。

《sirが高井 翔一を心配するのは当然でしょう。しかし、sirもこの数日間の高井 翔一の成長ぶりをご存知でしょう》

高井が魔導師として目覚めてからフェイトは時間を見て高井に魔法を教えていた。今は念話、スピードスパイダーのサポート付きでは出来なかった魔力の制御が高井自身で制御が出来るようになっていたが、まだ魔法そのものは覚えておらず、今は自らの手足に魔力を込めたパンチとキックぐらいしか出来ないのである。

その代わりにフェイトも凌ぐスピードと持久力、相手の攻撃を察知するカン是一般の魔導師では持ち得ない物を持っている。攻撃魔

法が使えなくても普通に戦える辺りにまでになった。

《彼は魔法の扱いよりも戦闘の方に長けていると見ます。パワーはやや不足はしていますがそれでもsir以外の相手にならひけを取らないどころか完封してしまうでしょう》

高井とフェイトと魔法を教える一環として模擬戦を行ったときの事をバルディッシュは言う。

その時はフェイトの攻撃を高井が全て避けて、フェイトに食いつかれないように動き、反対に高井がフェイトを攻めようとしてもフェイトから見ると攻撃の手が甘く、全て防がれていた。

そのため、お互いクリーンヒットはおるか、一発も当たらずに時間が来て終わったのである。

「うん、それは分かるけど…」

キンッ。

「っ！バルディッシュ！」

ジュエルシールドの発動を確認したフェイト。反応はすぐ近くの森の中だった。

「バルディッシュ、セツトアップ」

バリアジャケット姿に変身したフェイトはすぐに発生現場の近くに向かう。

「（フェイト、今のはまさか！？）」

頭に高井の声が響く。どうやら、高井も感じ取ったようだ。

「（うん、ジュエルシードがこの近くで発動した。今そこに向かっているよ）」

「（アタシもそっちに行くよ）」

アルフが二人の念話に割り込む。アルフもジュエルシードの反応に気づいたようだ。

「（ありがとう、二人とも。先に行ってるから）」  
そう言い、フェイトは念話を切る。

「アルフと翔一が来る前に、終わらせる。バルディッシュ」  
《Yes sir》

「あつ、やべ！」

「どうしたんだい、翔一君」

フェイトからの念話が切れ、今すぐに翠屋から出ようと急いで内ポケットから札を出し、会計を済ませる。

「すみません、この後用事がある事を忘れてました！というわけで失礼します！」

そして、脱兎の如く店を出て高町家の三人はもちろんのこと、近くにいたウェイトレスも呆然としていた。

「なんか…元気ありすぎというか、なんていうか…」

美由希は高井が走り去ったのを見て、ようやく口を開く。

「でも、面白い子だね」

「ふふ、そうね」

翠屋を出て、すぐにバリアジャケット姿に変身した高井はダッシュでフェイトのいるところへと向かう。高井のバリアジャケットは外見だけならランナーがよく見かける格好にしか見えないので平気で外に出られる。

《主、もう少し面白い言い方ありませんでしたか？》

「言う必要があるのかよ」

《ウケ狙いで》

「…ちなみに、どんな事言えば良かったんだ？」

スピードスパイダーはしばらく考え、答えを出した。

《…駅前留学に行く時間でした、とか》

「NOV〇かよ！その言葉分かる人いないと思うよ！」

《じゃあ、NOVAウサギが…》

「もう〇〇VAはいいよ！つーか、お前大丈夫！？」

デバイスの性格がおかしくなったか？と思いながらスピードスパイダーとの漫才(?)を終え、気を引き締め直し高井は前を見て走る。

「フェイトめ、無茶しないでって言うときながら自分でやってりや世話無いんだよ。ちよっとショートカットするぞ」

高井は路地へ入り、人目が無いことを確認し、ハイジャンプする。一回のジャンプでビルの屋上へと降り立ち、ジュエルシードが反応した場所に方向に向ける。

「あっちか…。行くぞ!!」

ジュエルシードへ一直線、道無き道を行く高井であった。

## 第七話（後書き）

ハイジ「どないしょ…」

高井「どしたの？」

ハイジ「いやな、次回投稿したらしばらくまた更新遅れる可能性が…」

高井「またかよ！？そんなに忙しいのか？」

ハイジ「いや、オリジナルの敵のネタを煮詰めるのに…」

高井「どんだけ煮詰める気だ…。ところで、オリジナルの敵ってどんなヤツなの？というか、出すんだ」

ハイジ「それは言えないなあ」

高井「なんだよ、それ」

ハイジ「まあ、楽しみにしておけ。それでは、また」



## 第八話（前書き）

ハイジ「皆さんお久しぶりです……。前回の更新から一ヶ月以上も間が空いてしまいました」

高井「本当になぁ……。オレもどんな口調だったか忘れたよ」

ハイジ「しかも、空いた割には相変わらず荒い作りと言う……。」「

高井「ちゃんとやろうぜ……。」「

ハイジ「ああ……。それでは、どうぞ」

## 第八話

ジュエルシードの反応を見つけるや否や、バリアジャケット姿に変身し、持ち前のスピードを発揮してあつという間にその現場に着く。そこでジュエルシードの力なのか巨大化した猫を発見した。フェイトは近くにあった電柱に降り立ち、その様子を見る。

「あれか…」

暴走して怪物と化してはいないが、ただ巨大化した猫をこれから痛めつけると考えたらジュエルシードを集めるためとはいえ、気が進まなかった。しかし、目の前にあるジュエルシードを見逃すわけにもいかない。

少しだけ我慢して欲しいという気持ちになった。

「ちょっと痛いかもしれないけど…我慢してて。バルディッシュ、フォトンランサー」

《Yes sir》

バルディッシュを森の中にいる猫に狙いを定め、フェイトの前に金色の魔力の球を作り出し、無数の光弾を獲物にめがけて打ち出す。

「ウニヤアアア」

森の中で猫の悲鳴とも思える物が鳴り響く。

分かっていたことだが、動物を痛めつけるなんていい気分ではない。それでも、やらなきゃならない。

「ん…？」

フェイトは不審に思う。巨大猫に放った攻撃が全て防がれていることに気づいた。そして、猫の傍に誰かがいることにも気づく。魔力を持つ存在だと分かり、自分の他にジュエルシードを探している魔導師がいるのかと考える。そうだとしたらまずいと思うや否や、フェイトはすぐに巨大猫に直進する。

林の中に入り、巨大猫を見下ろせる位置を取るために木の上に降り立つ。フェイトの目の前には二つの存在があった。一つは巨大猫。フェイトの攻撃で倒れ伏していた。もう一つは白い服を着て杖を所持しており、フェイトと同じ年ぐらいの少女がこちらを見ている。少女の身なりと持っている物、デバイスを見て魔導師と見た。

「バルディッシュと同系のインテリジェントデバイス…」

フェイトの攻撃を防いだのはこの少女の力のおかげだと思い、少女の方を見る。

初めて高井と出会った時の事を思い出した。あの時は丸腰状態で何も分かっていなかったジュエルシードを持っているという理由だけで高井に襲いかかってしまい、それで怒られた事がある。いくら相手が魔導師とはいえ、見ず知らずの相手に二度も襲いたくはなかった。

フェイトは少女を無視して、ジュエルシードが取り付いた巨大猫に視線を変えて、一直線に斬りかかる。同時にバルディッシュが形状が変化していく。

今まで下に向いていた黒い先端が曲がり、そこから金色の鎌のような刃を出現させる。巨大猫に目掛けて振り下ろす、が。

「危ない!!」

ガキン!

「!!」

少女にデバイスで止められ、目標にたどり着くことが出来なかった。どうやらこの少女がいる限り、ジュエルシードは回収できないと感じたフェイトは一旦下がり、目標を少女に切り替え、バルディッシュを構え直す。出来ることなら相手にはしたくなかった。しかし、邪魔をするとなれば、話は別だった。先程の迷いを打ち消すように自分に言い聞かせ、少女に言う。

「申し訳ないけど…」

フェイトは思う。

自分と昔から一緒にいたアルフのためにも、ジュエルシードが危険な物と知りながらもジュエルシード集めを手伝ってくれる翔一のためにも。そして、自分を待っている母のためにも!

「いただいでいきます…!!」

フェイトは静かに、強く少女に言い放ち、バルディッシュの魔力刃で少女を黙らせようとかかる。しかし、少女の両足首から桜色の翼が生え、空へ飛び、回避した。だが、フェイトはすぐに体勢を整え、魔法攻撃「アークセイバー」を放つ。

《Arc Saber》

バルディッシュが発すると同時にバルディッシュを地面に平行になるように構えてから、少女に向けて放った。しかし、少女が放つ防

御魔法に阻まれ、更に上空へと向かう。

「速い。けど、翔一と比べたら…！」

自身も空へと上がると一瞬で追い付く。少女はフェイトの速度に驚き、ほとんど無防備の状態に近かった。初めに少女の上段からバルディッシュを叩き込む。少女も何とか反応し、デバイスで防ぐ。その時に互いに目が合い、少女の方から口を開く。

「何で？何で急にこんなことを……」

少女はフェイトを睨むような瞳をしている。「…わたしには、やるべきことがあるから」と返し、一旦後ろに下がり、バルディッシュをサイズフォームからシーリングフォームに形状を変え、フェイトの周りにフォトンランサーを生成し、打ち出す準備をする。

「だから、ジュエルシードは…」

「っ…！」

「もらい受けます…！」

フェイトの周囲にあったフォトンランサーは少女に目掛けて撃ち出される。それが全て当たる事を確認したフェイトは瞬時に少女の後ろに回り込む。後ろから回り込んだフェイトに気づいておらず後ろがから空きだった。

（そこっ！）

チャンスと言わんばかりにバルディッシュを少女に目掛けて振り下ろす、が。

ガキーン！

「なっ…！？」

攻撃が当たる直前、少女は瞬時にフェイトの方に振り向き、とつさにデバイスで防御したのだ。しかし、それでも少女はフェイトに押し切られる形で叩き落される。しかし、地面まであと少しのところまで体勢を立て直し、再びフェイトのところへと向かっていく。

（この子、何故わたしの攻撃を・・・？）

完全には防いでいないとはいえ、少女からでは見えない角度でのフェイトの攻撃を読んでデバイスで防御したことに、今はそのことに驚いている暇は無かった。

少女を近づけさせないために再びフォトンランサーを何発も打ち込み、少女は襲い掛かるフォトンランサーに魔力壁で防ぐのが精一杯なのか、フェイトの元には行けなかった。

その間に砲撃魔法である『サンダースマッシャー』を打ち込む。

《Thunder Smasher》

「サンダー・・・」

「デイベイーン・・・」

少女の方も何かの魔法を撃ち出すためにデバイスを突き出し、先端を中心に桃色の魔法陣が形成される。そして、

「スマッシャー！！」

「バスター！！」

同時に強大な金色と桃色の魔力波が放たれ、ぶつかり合う。フェイトの放ったサンダースマッシャーは先ほどのフォトンランサーと

は比べ物にならない電撃を伴った砲撃魔法。フェイトの機動力を生かした戦い方に足を止めるような砲撃魔法はあまり使用しない。ほとんどは目くらましで使う。だが、これが当たれば大抵の相手はこれで倒れる。フェイトには少女がこれを防御しようがしまいようが関係は無い。当たればそれでいい。防げばもう一度バルディッシュで切り込めば良い。それだけだった。

しかし、少女は防ぐどころか砲撃魔法で応戦している。それどころか少女の魔力波の方がフェイトのサンダースマッシャーよりも強くなり始め、サンダースマッシャーが押されていた。

ついにサンダースマッシャーは打ち破られ、逆にフェイトがその魔力波を受ける立場になってしまった。予想外の魔力に驚きを隠せなかったがすぐに上へと回避し、旋回しながら少女の頭上に目掛けて降下する。

（今度こそ！）

再びサイズフォームに切り替え、振り下ろす。

ガキーン！

（また・・・！）

二度目。またしてもデバイスで防がれ直撃はならなかった。少女はさつきと同じようにフェイトに押されて落下するが今度は割とすぐに体勢を立て直した。

フェイトにその少女に対する未恐ろしさを感じた。先ほどのサンダースマッシャーを打ち消すほどの砲撃魔法、フェイトの攻撃の出口をまるで分かっているかのような反応。まだどこかぎこちなさはあるがそれでもフェイトには強いかも、と思わせるものだった。

『魔法』が全く存在しないこの世界でまさか自分と同等の魔導師が目の前に存在するとは思ってもよらなかった。それは間違いだ、と

訂正する。

フェイトの近くにも、こことは違う、『魔法』が存在しない世界からやってきた年上の少年も、この少女と同じように魔導師として存在している。

「ねえ！やるべきことって何！？」

少女の問いかけを気にも留めず、フェイトは自分がやるべき事に集中し、バルディッシュを構える。目の前にいる『強敵』に対して。

道無き道を走ってから数分、ようやく目的の場所が目に入る。その場所がまた林の中だったので前回の事が頭によぎった。

「フェイト、無事だといいが…」

《あの方が同じ轍を踏むとは思えませんが…早く反応のあった場所へ》

「ああ」

民家の上を助走し、間に道路を挟んで向こう側にある林にジャンプして突っ込む。

「元の世界に戻ったら跳躍系の種目にも、出てみようかな…」

しかし、それと今は関係ないので捨て置くことにする。  
林の中に入り、スピードをゆるめることなくジュエルシードの反応があった場所へ草、枝を踏みしめながら駆けだしていく。その途中



で高井はあることに気づく。ジュエルシードの付近に魔力の反応が3つあることに気づく。二つは上空に、一つは地上のジュエルシードすぐそばに。

「これは、誰がいるのか？」

《一つはフェイトさんと確認できます。あと二つの反応は…どうやら魔導師のようですね》

スピードスパイダーからフェイトの他に二つの反応があると聞く。

「魔導師？ まさか、ジュエルシード絡みか？」

《おそらくは》

「本当かよ…」

ジュエルシードの周りに魔導師がいると聞き、自分達も含めてやることはただ一つなのではないかと思う。

「なあ、今フェイトはその人達とジュエルシードを取り合っているって事なのか？」

《多分、そんな所でしょう》

「そうか…」

自分達と同じ様にジュエルシードを集める者がいる。魔導師となつた自分もそこに行けば必然的に巻き込まれる。

いくら、譲れない物を持ったといえど、自分と同じ人間。さすがに抵抗があつた。

「さすがに話し合いでどうにかならないのかな？」

《…相手がジュエルシードの価値を知らないなら話し合いは有効でしょう。しかし、相手も魔導師ならそれも聞いてくれるかどうか…》

戦いを避けられる可能性は低いと聞き、表情は曇る。  
高井はいつの間にか震えている手を見る。

「…ハハ」

《主？》

「…オレさ、今震えてるんだぜ？ フェイトが今そこで戦っているのに、オレはこれだよ…」

今、高井の中ではこれから自分もフェイトと戦っている魔導師達、人間と戦うという事に恐怖を感じていた。自分からジュエルシード探しを申し出たにも関わらず、今起こっているであろうジュエルシード争奪戦に怯えを隠せないでいた。

《…主のむやみに人を傷つけない気持ちは分かります。ですが、ここで主が向かわなければ主とフェイトさんはどうなります？》

「スパイダー…」

《私は主には前に進んで欲しいんです。主が諦めなければ、私は主の力になります。だからここで止まらないでください…》

自分の相棒の言葉を聞き、震えている手を握りしめる。

「…そうだな、ここで行かない方が情けないな。悪い、スパイダー」

これから目の当たりにする状況に対して恐怖が無いわけではない。  
だが、黙って見過ごすようなこともできなかった。

《主、あまり自分のことを情けないと思わないでください。戦うことに恐怖を感じない人間なんていません。その感情を忘れないでく

ださい》

「ああ、分かったよ」

《それと、反応のあった場所までもう近くです》

いつのまにかジュエルシードの近くまで来ていた高井はスピードをゆるめ、ジュエルシードのありかを確認したとき、高井はあつけに取られる。ジュエルシードがある所には巨大な猫が横になっているのが見えた。

「あれ…だよな…？」

《…そのようですね。ジュエルシードの反応も確認できます》

猫の巨体に思わず唖然としていた高井も本来の目的を思い出し、フエイトがいますと思わしき上空を見る。

「フエイトは…おつ、いたいた…って、えっ？」

上空を見てフエイトの無事を確認する。その時、フエイトと戦っている人物を見て高井は驚愕する。その人物はついこの間知り合った少女だった。

「な…なのは…ちゃん？」

少女、高町　なのはが何故ここにいて、現在フエイトと対峙しているのか分からなかったが、なのはは魔導師として覚醒し、彼女もジュエルシードが目的なのだろうと判断した。その証拠として彼女のデバイスらしきものを持っているのが分かる。

《…主》

呆けているとスピードスパイダーに気付かされる。

「…あつ！すまんすまん。それで、あれどうする？」

今はなのはこのことを気にしている場合ではないと思い、高井は猫の方を見る。

《そうですね。主、以前の様に蹴り飛ばしますか》

「ええっ？」と高井はスピードスパイダーの指示に驚く。そんな事をしてしまえばただではすまないのではと考えたからだ。

《大丈夫です。気絶させるようにはしますから》

「そうか、じゃあ頼むよ。」

…ちよつと痛いけど、すぐに元に戻してやるからな」

そう言う和高井は右足に魔力を込め、全速力で走り出す。走り方が短距離走のようなフォームになりトップスピードのまま巨大猫に突っ込む。その速さは視認するには厳しい物になり、高井が走った後には蹴り上げた草と土が舞い上がる。

ある程度距離を詰めたところで猫にめがけてジャンプし、走ってきた勢いそのまま右足の飛び蹴りを巨大猫の腹にぶつけた。

猫はその巨体を蹴った方向に宙に浮かされ、その後に大きな衝撃が森の中で響きわたる。そのおかげで巨大猫からジュエルシードが吐き出されるように出てきた。

「取った！」

ダッシュでジュエルシードを左手で取り、すぐにその場を去った。去った後には普通の大きさの猫が横たわっていた。

「!？」

大きな衝撃音に驚き、下を見るとそこにいるはずの猫が姿を消していた。その隙に対峙していた金髪の少女の姿も見えなくなっていた。

地上に降り立ち、確認すると猫は元の大きさに戻っていた。

「ユーノ君、ジュエルシードは!？」

高町　なのはは近くにいたフレット(?)、ユーノ・スクライアにジュエルシードの有無を確認するがユーノは首を振る。

「誰かがすごい速さでやってきてその人が猫に一撃を加えて、ジュエルシードを奪ってそのまま逃げていったんだ。多分魔導師だと思うけど、あんなスピードを出す魔導師なんて見たことがない……」

ユーノ自身も信じられない様子でその時のことを語る。

「じゃあ、その人がどんな人か分からないんだ……」

「うん。ごめん、なのは。僕がしっかり見ておけば……」

ユーノのがつくりと頭を下げる。なのはのサポートが出来なかった責任があると感じたためだった。

「ううん。ユーノ君が見えなかったと言っているんだから仕方がないよ。でも、本当に誰だったんだろ……」

なのは達はジュエルシードを持って行った者、そして、なのはと戦った少女は誰なのか、疑問は無くならなかった。

ジュエルシードを確保し、全力で走り去った高井はそこから大分離れた公園に着き、フェイトが来るのを待つ。

「うまくいったな。スパイダー」

《さすが主、電光石火の早業でした》

「まあな」

目の前にあったベンチに座り、さっきまでの事を思いながら一息つく。空を見上げると、もう昼下がりといった所だろうか。

公園の中には砂場遊びをしている子供が数人いて、その近くに大人が談笑している。そして、滑り台やブランコなどの遊具で父親と遊んでいる子もいた。その光景を見て昔の事をふと思い出す。

「なあスパイダー、あれはどう見てもなのはちゃんだったよな」

自らの疑問をスピードスパイダーに問いかける。内心、違うと言っ  
て欲しかったが現実はそのようなわけにはいかなかった。

《そうですね。彼女は魔導師として目覚めています》  
「やっぱりそうか…」

フェイトとなのはがジュエルシードを巡る戦いは高井が持ち去ることで一応は終息したが近い内にまた遭遇するだろう。しかし、高井が気にするのはそこではなかった。なのはがフェイトの友達にな

つてくれるかどうか考えていたため、機会があれば紹介しようと考えていたがその前に二人はジュエルシードの事で対峙してしまい高井の考えはもろくも崩れ去った。「まいったなあ」と言い、手を額に当てる。

「まさかあそこで二人が会ってしまっなんてな…」

《以前の反応とは似たものでしたが、力の大きさがまるで別物でした。今の高町なのは主やフェイトさんと同等の魔力を持っています》

「ほんとかよ…ん？フェイトはともかくとして、オレも？」

《ええ。自覚はありませんでしたか？》

「うん、全く。って、オレの事はいいんだよ。フェイトがなのはちゃんとあんな形で会ってしまうなんて、どうすりゃいいんだよ」

《高町なのはがジュエルシードを集めている理由は分かりませんが、明確な目的があれば先ほどのような事は避けられないでしょう》  
「うーん……」

スピードスパイダーと会話していると、高井からの念話を聞きつけたフェイトとアルフがやってきた。フェイトはバリアジャケットから普段から着ている黒で統一された服に変わっていた。フェイトの隣にアルフがいることに疑問に思った高井だったが途中で合流したのだらうと思うことにした。

「翔一、ジュエルシードは？」

「ここにあるよ」

ポケットからジュエルシードを取り出しフェイトに渡す。フェイトは高井に礼を言い、ジュエルシードを受け取る。

「これで三つ目だな」

「うん」とフェイトは応えるがどこか声が暗い感じを受けた。アルフからも「良かったね」とフェイトに言うが、高井と同じ反応だった。

「あんた、本当に足速いね。アタシもフェイトからの念話を聞いてすぐに駆けつけたのに着いた頃には翔一が持って行ったってフェイトが言うから」

「足の速さだけなら負ける気はしないさ。もっとも、こんな事が出来るのは魔法のおかげなんだけど」

いくら高井が足が速くてもそれは魔法の力だからだ。魔法無しではそんな早業とも言える事など出来るわけがないのは高井も分かっていた。

「さて、ジュエルシードも確保したし、帰るか」

「ああ、そうだね」

今日の戦果であるジュエルシードを持ち、三人は今日の探索を打ち切ることにした。

「あのさ、フェイト」

「ん、なに？」

「フェイトが戦っていた子って誰なんだ？」

公園から出てしばらくしてから先程の事をなのはの事は伏せて、フェイトに何故なのはと戦っていたのかを聞く。

「…見ていたんだ」



「ああ。ジュエルシード絡みか？」

「…よく分からない。けど、あそこにあの白いバリアジャケットを着た子がいたからそうだと思う」

「そっか…」

この世界の住人であるのは何故ジュエルシードを集めるのか分からなかったが、今それを聞かない限り分かりそうに無いので考えることをやめた。

「ねえ、あの子って誰の事？」

高井とフェイトの会話の内容が気になったアルフは二人を尋ねる。

「実はな、ジュエルシードの反応があつた場所に今言つた魔導師の女の子がいたんだ」

「そうなのかい。まっ、ジュエルシードはこっちにあるから関係無いけどね」

「でも、いずれまた会つかもしれない…。ひよつとしたらだけど、ジュエルシードを巡ってあの子と戦つかもしれない」

なのはの強さがどれほどの物かは知らないが、フェイトの肩が少し震えているように見えた。魔力だけではなく実力もあるのだろう。

「…フェイト」

「大丈夫だよ、二人とも。わたし、負けないから」

フェイトはそう言いながら笑顔になるが、二人にはそれが無理をしている風に見えた。そんなフェイトを見て、高井はフェイトの頭を撫でる。

「しよ、翔一？」

「あんなフェイト、無理に強がらなくてもいいんだぞ」

「わたしは別に…きゃっ」

わしゃわしゃとフェイトの髪を掻き、それを止めると「うゝ…」  
と若干恨めしそうに見上げながら、乱れた髪を直す。

「一人で何でもやろうとするんじゃない。さっきだってジュエルシードを一人で封印しようとしに行っただろ」

フェイトに目線を合わせるようにしゃがみ、また手を頭に触れる。

「フェイトがオレに無茶して欲しくないのと同じように、オレはフェイトにもあまり無茶をして欲しくないと思っている。

そりゃあ、フェイトは魔法に関してはオレより先輩だし、やれることはたくさんあるだろうけど、それでも無茶してもいいわけじゃないだろ」

「でも…」

「フェイト、もう少し周りを頼ったっていいんだよ」

フェイトは一人でなんでも頑張ろうとし、多少それが行き過ぎ、いつか無理をして倒れてしまうのではないかと高井は危惧していた。この少女には誰かがいないと一人で突っ走ってしまい、誰にもいないところに行ってしまうのではないか、そう思っていた。

「君は一人でいるわけじゃないんだ。アルフやオレだっているんだ。なにかあつたら頼ったっていいんだぞ」

「オレはあまり頼りにならないかもな」と苦笑いしながら付け加える。

「そうだよ。フェイト」

「アルフ」

「その子がどんな子か知らないけど魔法ならフェイトに勝てるヤツなんていないとアタシは思ってるさ。」

「万が一、なにかあったってアタシがいるさ。あと、翔一もいるし、ね」

「ああ、そうだな」

アルフの「任せとけ」と言わんばかりの表情に翔一もそれに応える。

「うん。」

「ごめんね二人とも、わたしのために……」

「気にしないでいいよ、お姫様」

「お、お姫様って……」

お姫様呼ばわりされ、顔を赤くし俯いてしまい、「ちょっとクサすぎたかな……」と滅多に言わないセリフを言っただけでその恥ずかしさで後悔し、高井も若干赤くなる。

「そ、それよりも、早く帰ろうぜ」

「う、うん。そうだね」

二人は少し慌てた様子で再び歩きだし、アルフは「なーにやってんだか」と思いつつも微笑みながら、後を追った。

「あれ、翔一？」

アルフが何かに気づいたのか高井を呼び止める。

「どうした？アルフ？」

「いやさ…、アンタいつまでその格好なんだい？」

「えっ？…あっ！」

アルフの指摘で気づかなければ家に着くまで気付かなかっただろう。高井は今まで自分がバリアジャケット姿だったことに忘れていたのだった。

「そういえばずっとこれだった。全く気づかなかったよ」

「スパイダー、戻して」と言い、バリアジャケットからいつものジヨグの格好になる。

「アンタのバリアジャケット姿って走る格好にそっくりだからアタシも気づかなかったよ」

「オレもだよ」

少し手を加えるか、と少しだけ考えたのであった。

## 第八話（後書き）

ハイジ「前書きにも書きましたが私事で一ヶ月以上も間を空けてしまい、すいませんでした。おかげでお気に入りの数が減っている・・・」

高井「まあ、当然だわな」

ハイジ「言い訳をするわけではないけど、一ヶ月前の駅伝からすこぶる調子が良くなってな、走るのがすごい楽しくなったのよ。おかげで文を書かずにボタンキューする日が何回続いたやら・・・」

高井「『執筆より走る方が楽しいぜ！』って言ってたもんな・・・。気持ちには分かるけど」

ハイジ「今は少しクールダウンしたわ。だからといって、走るのを止めたわけでもない」

高井「作者さんが元気に走っていることはオレも嬉しいけど、たまには書いてくれよ」

ハイジ「ああ、分かったよ。小説のほうなんだが、君がなのは世界に移転する前の話とかもちよつと書いてみようかな、と思うんだがどうだ？」

高井「本当かよ・・・。あまり知られたくないな・・・」

ハイジ「そこは我慢してくれ。それでは、また」

## 第九話（前書き）

ハイジ「2011年、最初の更新です。 さて、本日は特別ゲストをお迎えしております」

高井「あー、最近は歳も同じぐらいになっちゃったな・・・」

ハイジ「さて、第九話です。どうぞ！」

## 第九話

夕飯を食べ終え、高井はいつものようにソファーに仰向けに寝転がりながら携帯ゲームをしていた。

中学生の時に買って貰ってからこれは高井の必需品となっていた。携帯ゲームとしてはもちろん、音楽プレーヤーとしても使えて、自分の走りのフォームをビデオで撮った物を取り込んで動画としていつでも見れることから高井の中ではかなり重宝している。普段は見ることができない自分の走りを第三者の視線で見ることが新鮮な気持ちになれる。

「翔一、今いいかな？」

ゲームをしているところに住まわせて貰っている少女、フェイトが高井を呼ぶ。視線をチラッとフェイトの方に向け、携帯ゲームの電源を切り、テーブルに置く。

「ごめんね、いきなり」

「構わないよ。それよりも何だ？」

「四つ目のジュエルシードがある所、掴んだよ」  
「マジで？」

ジュエルシードを見つけたという言葉聞き、身体を起こす。

「それで、今度はどこなんだ？」

「ちよつと待ってね」

フェイトが持っていた地図をテーブルに広げようとするのを見てすぐにゲーム機をどかす。

「今回は反応のあった場所が遠くて、探す範囲が広いかもしれない」  
「あれ？いつも探すときに使っている探索魔法って奴を使って場所が分かったんじゃないのか？」

「あまり離れているとはつきりと特定できないから、もう少し近くに行けば分かるかもしれない」

「そっか、次は見つかるの良いな」

「うん」

探索魔法を使ってもジュエルシードを見つけれなかった日もある。わずかな魔力反応がそこにあるだけで実際に行ってみないとあるかどうかさえ分からない。3人がジュエルシードの場所を発見できたのはいずれも発動後。それ以外は高井が所持していたものを譲り受けた物だ。発動前に発見したものなど無い。というより、発動した後の方が発見しやすい。しかし、それでは二つ目や三つ目を発見した時のような事態になるので、万が一のために備えておく必要がある。ジュエルシードが何かに憑依する前に回収したいがなかなかそういうわけにはならない。そして、高井達の他にもジュエルシードを集める存在もいる。高町　なのは。高井がほんのちよつと前に知り合ったこの世界に住む少女だが、この間会ったときは魔導師となっていた。彼女とはジュエルシードの争奪戦で必ず出会う。そうなれば、戦う可能性がある。無論、高井にも。

それでも順調に3つ目のジュエルシードを見つけてきた。その勢いのまま4つ目と行きたい3人だった。そこへそのうちの一人である、先ほどまで風呂に入っていたアルフがやってきた。

「翔一、出たよー。後はアンタだけだ」

「ああ。分かったよ」



テーブルに地図を広げているのをアルフは見て、「なにやってるの？」と近づいてきた。

それに高井が「フェイトがジュエルシードを見つけた」と答えると真剣な表情になる。

「大まかに場所を記すと・・・この辺りだよ」

赤ペンでジュエルシードがあると思わしき場所に丸を付ける。地図上で見ると範囲はあるところを中心になっていた。

「海鳴温泉・・・？」

この世界に来てからある程度の地理が把握出来てきたので自らの拠点であるマンションと4つ目のジュエルシードがある場所の距離は、今までの中で一番離れていた。

高井はジュエルシードがあると思われる場所の近くである「海鳴温泉」というところに注目した。そこで高井はフェイトにあることを提案する。

「フェイト、今回のジュエルシード探しはオレに任せてくれないかな？」

「えっ？ どうして？」

「だってジュエルシードがあるって言った場所、温泉街じゃん」

「翔一、オンセンガイって？」

フェイトとアルフから温泉について聞かれ、高井も温泉について詳しく言えない為どう答えようかと「うーん」となりながらも考え、すぐに頭に浮かんだことを口にする。

「簡単に言ったらでかい風呂、かな？ 普通の風呂よりも疲れとか

取れる効果があるのか……。まあ、そういうのがたくさんある街かな？」

と、それこそ大雑把に答えることしかできなかった。しかしアルフは「でかい風呂」という言葉に食いつき、目を輝かせていた。

「でも、どうして翔一だけでジュエルシードを探すのとそれがなんの関係があるの？」

「んーとね、フェイトとアルフにたまにリフレッシュが必要かな、と思ったんだよ」

「別にわたしは必要ないよ」

「フェイト、何も知らないと思っているのか？」

何のことが分らず首を傾げる。それを見て、「はぁ」と溜息をつく。

「知ってるんだからな。夜にこっそりアルフと一緒にジュエルシードを探してるのを」

それは初めて高井が魔導師として戦ってから数日経った時の事だった。その日は珍しく、ゲームで夜更かししてしまい普段なら寝てる時間まで起きていた。時間は既に日にちが変わってから大分経っていた。

「…もうこんな時間か。　はぁ、これで何回目だよ…」

ちなみに、高井がしていたのはとあるRPGのミニゲームだった。そのミニゲームの内容はとある聖騎士の男が最強の武器と言われるアイスソードを手に入れて、それを冒険者に見せびらかした瞬間、そのアイスソードを殺してでも奪おうとする冒険者から時間内にアイスソードを守りきるという内容だった。しかし、このミニゲームに出てくる冒険者は非常に強く、高井は発売してから一回もこれをクリアしていない。攻略法をネットで探そうとしても「これなんて無理ゲー」などと書かれているだけだった。「もう無理」と言い、携帯ゲームの電源を切りテーブルに置く。

「ノドが渴いたな」

寝室から出て、台所の冷蔵庫にあるスポーツドリンクを飲もうとするところにリビングから物音がするのを聞いた。

「……？」

何かと思い、リビングの扉の前で聞き耳を立ててみると寝ていると思っていた二人の少女の声がした。

「行くよ、フェイト」

「うん」

ベランダが開く音がして、それから数分してからリビングの扉を開ける。すぐ横にフェイトとアルフが使用しているベッドがある場所へと向かう。高井の予想通り、ベッドはもぬけの殻だった。その足でベランダへと向かうと自分が閉めたはずのロックがされておらず開いたままだった。

この段階で二人は高井に内緒でジュエルシードを探していたのではないかと考えた。

「あいつら…オレに内緒で…」

二人のことだから自分に迷惑をかけまいとやっていると推測しながらベランダの扉を閉め、冷蔵庫の中にあったスポーツドリンクを取り、コップに入れた。

フェイトと約束した「無茶しない」という言葉を頭の中で思いながら遠見市内の夜景を見ながらスポーツドリンクを口に含み、のどを潤す。

「…自分で言つといて、そりゃ無いだろ」

今頃フェイト達はこの遠見市のどこかにいるのだろうと思いがら。

今の高井とフェイト、アルフはまるで子のいたずらがばれて親に怒鳴られているという状況を醸し出していた。フェイトとアルフは高井を前にして、特にフェイトはこれから何を言われるのかと思い、萎縮している。

「何でオレに言わないのになって思ったよ。それとな、心配なんだよ。寝る時間まで削ってまでそういうことをしていると思うと、二人には一日だけでもジュエルシードのことは忘れて、この近くの温泉でも入ってゆっくりして欲しいんだ」

「でも…」

「だから、この場所のジュエルシードはオレに任せてくれ、頼む」

二人がジュエルシードを集めるために一生懸命になっているのは

十分承知だった。初めて出会った高井に奇襲まで仕掛けてまで手に入れようとした品物だ。そのためなら徹夜ぐらいするだろう。しかし、成長段階であるフェイトの体調を気にする高井がそんなことを簡単に許すはずが無かった。

「フェイト、翔一の言う通りにしよう」

「アルフ」

「アタシが言うのもなんだけど、やっぱりフェイトは休んだ方がいいよ。フェイトだっていつもこんな事ばかり続けられないから」

途中からアルフの方からフェイトにだけにしか聞こえないように念話を送る。

「（翔一の顔を見れば分かると思うけど断ろうとしても無駄だよ、これは）」

二人は今の高井の表情を見て、「確かに」と思う。

「（それに、その「温泉」っていうのも興味あるしね。ここは翔一に任せよう。何かあったら、アタシ達でフォローをすればいいからね）」

アルフからの念話を切り、フェイトは高井の顔と目を見て、思う。この人は何で、わたしに対してこんなに気を遣ってくれるのだろう。毎日、ジュエルシードを探すと言って走り込んでいながら家事が得意でないわたしの代わりに炊事、掃除をしてくれて、それでいながら魔導師としての修練も積んでいる。ならば、彼も同じように休むべきなのに…。

「フェイト…?」

「…えっ？何？」

「いや、何じゃなくて、オレの顔に何かついてるか？さっきからずっとオレの事を見てただけだ」

「う、ううん、なんでもないよっ」

念話を切ってから数秒ほど高井を見ていた事に気づいたフェイトは顔を真っ赤にし、うつむいてしまいが、フェイトは高井の言っていた事を思い出し、顔を赤くしながらも高井を見て、もう一度思う。この人を信じてみよう、と。

「翔一が言うなら、お願いしてもいいかな？」

フェイトからの言葉を聞いて高井は笑顔で「お任せあれ」と答えた。「ただし」とフェイトが付け加える。

「翔一も、わたし達と一緒に休んでもらうから」

「なんで？」

「翔一もいつもアタシらにご飯を作ったり、一人でジュエルシードを探すために町の中を走ったりしているから、翔一もたまにはゆっくりしていったほうがいいと思うよ」

二人も高井がジュエルシードの探索の手伝いをさせてくれているだけじゃなく、日々の生活の支えにもなってくれている。休んでほしいという思いはどちらも同じだった。

「オレは体力だけは自信があるから大丈夫だよ。そこまでしなくても…」

「翔一っ」

「…分かったよ。まっ、オレも久しぶりの温泉だしな。それもいいか」

高井はソファから立ち上がり、リビングから出ようとする。

「じゃあ、オレはちょっと部屋が空いている旅館があるか聞いてみるよ。あればいいんだけどな・・・」

高井はいったん部屋に戻り、自分の携帯電話を取りに行った。この世界に来てから使い道がなかった携帯電話だったが、ここでようやく使う時が来た。この世界でも電話が通じるのか少し不安はあった。再びリビングに戻り、さっきまで居たところへと座る。

電波は何の問題も無い事を確認し、電話帳で海鳴温泉の中にいくつかある旅館でどれにするかを決める。その中に広告付きで紹介されている旅館があった。その名は「竹青荘」。高井は直感でこの旅館にしようと思っ竹青荘の電話番号を押す。

『はい。竹青荘です』

男性の声で「竹青荘」と言った。良かった、この携帯でも繋がった。高井は安堵し、電話の主にも部屋の予約をする。

「こんにちは、遠見市の高井という者ですけども」

『はい』

「そちらの旅館の部屋を予約したいのですが、今よろしいでしょうか？」

予約したいという旨を伝え、「そうですか、少々お待ちください」と電話の主が電話を保留にし、数秒ぐらいで再び出た。

「お待たせしました。部屋は空いておりますので大丈夫です。いづれがよろしいでしょうか？」

「ちょっと待ってください。

いつごろ旅館に行く？明日のほうがいいかな、とは思っただけど」

話し口を手で塞ぎ、二人に意見を求める。二人は「それでいいよ」と言い、高井もそれを見て確認した。

「すみません、明日でよろしいでしょうか？」

『何名でのご予約でしょうか？』

「大人二人と子供一人の三名です」

『分かりました。お客様の御名前は高井様でよろしいでしょうか？』

「はい、高井でお願いします」

『かしこまりました。では、お待ちしております』

電話を切り、予約を完了させた高井。

「と、いうわけで明日行くことになったからみんな、今から準備するぞ」

「うん」

「あいよ」

こうして、3人はジュエルシードの探索を兼ねた小旅行に行くこととなった。

三人はバスに揺られながら、ジュエルシードがあると思われる場所に近い海鳴温泉へと向かった。乗り込んだときはそこそこ乗客もいて、空いている所に座っていたが目的地が山のほうにあるため、だんだんと近づくにつれて乗客も高井達三人だけとなった。アル



フは一番後ろの席を陣取って窓の景色を見ながら、何かを見ては騒いでいる。フェイトはそんなアルフを見て注意をしている。そして、高井はフェイトの座っている窓側に座り、窓の景色を見ていた。

「もう、アルフったら…」

「あいつめ…もうちょつと落ち着けないのかよ…」

もつとも、人がいる間はこんな事はしていなかったので高井達3人しかいなくなってからやり始めたのだが、どちらにしたって一緒だった。

「もうわたし達だけになっちゃったね」

「平日に温泉街に行く人なんてあまりいないだろ。明日は休日みただけだな」

「こっちの日本は土曜日全部が休日なのかよ…」とつぶやきながら風景を見る。

もうすでにバスは山の中に入り、周りの風景ものどかなものに変わっていた。景色を見て、ふと元の世界で住んでいた家のことを思い出す。

高井 翔一には整骨院を営んでいる父親と母親、そして3人の兄がいる。翔一の家はほとんど山に囲まれたところにあつた。しかし今見ている風景のように周りを見渡しても木しかないものでは無く、数キロほどで平野部に出るようなものだ。それでも周りの人間から見れば田舎と言っても差し支えが無かつた。

まだ翔一がフェイトの年の頃には春、夏、秋には近所の友達と山道で追いかけてこや集落全部を使った鬼ごっこ、特に夏の時期になると山でカブトムシやクワガタを捕ろうと勇んで行ったりもしたが結局捕れず終いだつたこともある。冬になると家の近くにスキー場

があり、ナイタースキーの時間になると仕事が終わった父や家にいる兄、友達と共にスキー場へ行き、スキー場の営業時間ギリギリまで滑っていたこともある。

3人の兄はそれぞれ独立し、昔のように家族全員が集まる機会は減ってしまい、家にいるのは両親と翔一だけとなった。それでも会えない訳では無い。翔一は家族と過ごす時間をより一層大切にしようと思った。翔一にとって家族は『今』の自分の基礎となった存在なのだ。陸上でインターハイに出られたのも、走っていられるのも、今をこうして生きられるのも自分以外の周りの人間、特に家族の存在があつてこそだと翔一は考える。

騒がしくも、優しく見守ってきた家族が翔一は、好きだ。

バスの窓越しに映る景色を見て、昔の懐かしさと元いた世界いる家族を思っていた。

隣に座っていたフェイトはそんな高井の様子を見ていた。

「それでは、ごゆっくり」

「はい、ありがとうございます」

予約していた温泉旅館に着いた一行は部屋へと案内された。部屋は温泉旅館ではよくある和風で中々広かった。フェイトもアルフも初めて見るこの国特有の和式の部屋に感嘆の声を漏らしていた。

高井はスポーツバッグの中に閉まってあったスピードスパイダーを取り出す。

「出番だぞ。スパイダー」

《一緒に頑張ろうね。お姉ちゃんがついてるから》  
「そうか、オレは今からお前を投げ捨てることに頑張るわ」

スピードスパイダーが妙な女言葉を発し、高井はシューズを窓から投げ捨てる体勢を取った。

《待ってください主！！そんな殺生な！！》

投げ捨てられることに必死で抗議するスピードスパイダーだった。

「気持ち悪い声を出すな！いきなりなんだよ！」

《知らないんですか！今、流行りの擬人化お姉ちゃんですよ！？》  
「そんな流行り知るかぁ！！」

このデバイスの妙な知識はどこから入れてくるのか。高井は心の底から思った。

スピードスパイダーを起動状態にさせ、履いた瞬間ゆるゆるな状態になっていた靴紐が生き物のように動き、高井の足を引き締めるかのように結んでいった。

「さあて、行くか」

「もう行くの？」

「ああ。昼飯までには戻ってくる」

窓に身を乗り出し、今にも落下しそうな体勢をとる。

「翔一、探索魔法を使ってもう一度調べてみる？」

「大丈夫。オレにもフェイトほどではないけどスパイダーのサポートで魔力の反応は感知できるから」

「でも」と言うフェイトに高井はポンとフェイトの頭に手を乗せる。

「フェイト、アルフと楽しんで来いよ」

フェイトの頭を撫でると、フェイトは顔を赤くなってしまい、俯く。

「う、うん」

「んじゃあ、アムロ、行きまーす！」

窓から飛び降り、フェイトとアルフは下を見るが高井の姿はそこにいなかった。

「もういなくなっちゃった」

「そうだね。どうする、フェイト？」

「…わたしはここで待ってるよ。アルフ、好きな所へ行ってきたもいいよ。お昼になったらまた戻ってきてね」

「ホント？ それじゃ、行ってくるねー」

アルフはうきうきしながら部屋から出て、フェイト一人だけとなった。フェイトは高井が飛び出した窓に映る風景を見て、呟いた。

「翔一、気をつけてね…」

「いつてー…」

《主、大丈夫ですか…》

勢いよく部屋から飛び降りて、走り出した高井だったがその勢いが付き過ぎて正面にあった大木を避け切れず衝突し、顔面を強打。その激痛に耐え切れず先ほどまで転げまわっていたのだった。

「…安全運転で行こうか、スパイダー」

《それは主のほうです。 先行き不安というのはこの事を言うのですかね…》

## 第九話（後書き）

ハイジ「お前なあ、いきなり顔面ぶつけるってどうよ？」

高井「うう…、マジで痛かった…」

ハイジ「魔法で守られていなかったら今頃顔面粉砕だったぞ。

さて、前書きでも書きましたが今日はゲストに天照大神先生の作品「魔法少女リリカルなのは」転生せし物語」の主人公、津川優星君に来て頂きました！」

津川 優星（以下、優星）「あつ、どうも、ここでは初めまして。ハイジさんに翔一」

高井「ああ。ようこそ、優星君」

優星「それと…ごめんね。 僕のおかげで翔一が…」

高井「ああ、オレはもう気にしていないよ。ただ、一夫多妻制には驚いたな…」

優星「僕もだよ。まさかこんな形で5人と付き合うなんて…」

ハイジ「しかも、全員体験済み…」

高井「余計な事を言うんじゃない！ でも、それ以前からそれに近い空気はあったよな。あの、FFF団とか…」



こと、守ってあげてね。それから、僕のことは別に優星って言うてもいいんだよ」

高井「ああ、分かったよ」

ハイジ「さて、優星君。宣伝タイムだよ」

優星「はい。僕、津川 優星が主人公として出演している「魔法少女リリカルなのは」転生せし物語」は現在連載中です。最近はいろいろあつて5人の女の子と付き合っていたり、結婚もしていないのに子供ができたやつたり「優星、子供いるの!?（高井）」しよ、翔一?」

高井「15歳にして子供：いろいろとすつ飛ばした結果がそれか：」

ハイジ「（小声）優星君、ごめんね、こいつ最新話見せてないんだわ。ちよつと、こいつを落ち着かせてくるわ。ちよつと待ってね」

高井「ちよつと待って!?!子供ってそんな早くにできるものなの!? ねえ、作者さん!?!」

ハイジ「はいはい、落ち着こうね」（ズビシッ!）

高井「がはっ」（ボタン）

ハイジ「はい、続き」

優星「あ、はい。・・・まあ、いろんな事がありますがみんなを守るようにがんばりたいと思います」



ハイジ「はいどうも、ありがうございました」

優星「こちらこそ。それで、翔一は…?」

ハイジ「どうせすぐに目を覚めます。心配なくていいよ」

優星「そうですか。僕はこれで戻ります。翔一によろしくって伝えてください」

ハイジ「おう、そっちでも元気だな」

優星「はい、それでは」

ハイジ「こちらも、それでは、また」

天照大神先生、優星君の出演許可をありがとうございました。上手く優星君を書けたかどうか不安ですがいかがだったでしょうか?今後もよろしくお願いします。

## 第十話（前書き）

ハイジ「何ヶ月ぶりの更新だろうな」

翔一「一体どんだけだよ」

ハイジ「本当に他の作者様が羨ましいわ……。文才もそうだが、執筆速度が欲しい……」

翔一「たく……。それでは、どうぞ」

ハイジ「あと、今まで地の文で翔一の事を姓の「高井」と書いてきました。今回からは「翔一」と書いていきます。姓読みは飽きた・」

翔一「飽きたってなんだよ……」

## 第十話

一步踏めばスピードスパイダーが土や草を食い込み、地面に落ちた枝が折れる音が小さく鳴る。現在三個ある内の二個のジュエルシードはいずれも林の中で発見し、今回は温泉街という山に囲まれた場所にあると思われる。そのせいなのか、緑の多い所にはやたら縁がある、と翔一は思う。山の中を歩くするのは小学生の時に地区内の友達と冒険ごっこ等で遊び回り、走り回っていた時以来だった。急な坂道を駆け登り、草むらを掻き分けて、山道を誰よりも先に走りぬけ、その先には意外な場所にまで辿り着いたりといろんな事でわくわくしていた。時々、友達と遊んでいる途中で雨が降って急いで家に駆け戻ったり、転んで怪我をしたのも今となっては良い思い出だった。その中で様々な事を学び、育った。その頃の翔一はそれが「幸せ」であり、その瞬間がずっと続くとさえまで思っていた。

《主》

「…っ。どうした」

すると、足元のスピードスパイダーから呼びかけられ、我に返る。

《いえ、何か考え事をしていたのですか？》

「ちよつと昔を懐かしんでいただけだよ。気にしなくていい」

《そうですか。でも、気をつけてくださいね。またさつきみたいな事になっては困りますから》

「分かっているって。でも、懐かしいんだよ。こんな風に山に入る事がな。もつとも、一人でここまで奥に入り込んだことは無かったけどな。魔法が無かったらこんな短時間でここまで来る事も出来ないぞ。今なら熊が出てきてもワンパンチでKOできるかもな」

今のところそのような物は出てきてはいないが、何が出てきてもおかしくは無い雰囲気醸し出しているのは確かだった。本日天気は晴れだが辺りはうっそうとした深林で日の光が薄く射し込んでいて、辺り一帯は不気味さを漂わせていた。山で遊んだことはあっても、今回のように翔一一人で奥まで入り込んだことは無く、若干心細かった。ふと、自分が代わりに探さなければフェイトがこんな気分を味わうのかと思う。それでダウンな気持ちになりかけていた自分に何とか奮い立たせる。

現在、翔一はバリアジャケットを展開させながら海鳴温泉街の周りにある地元の人間も余り足を踏み入れそうに無い山奥でジュエルシードの探索を行っている。バリアジャケットの展開をしなくてもジュエルシードの探索自体は出来るが万が一、何かあった時のために翔一が旅館から飛び降りながら展開したのだった。張り切って走り出したはいいが、その直後に顔を強打してしまったが、ようやく痛みが引いたばかりだ。そんな事もありながらも翔一は今、スピードスパイダーを介してジュエルシードのわずかな反応を感じ取ろうと山の中を歩いていた。

「んでスパイダー、ジュエルシードの反応は？」

《そうですね…どうやら、この方角には無いようですね。》

「そっか、やっぱり簡単には見つからないか…」

探索を開始してからしばらくして、ジュエルシードの反応は掴めてはいるものの、いずれも微弱でばらつきがあり、これといった物は無かった。それでも山を歩きながら場所を当てるために足を止めない。動いてもすぐには見つからない。だが、動かなければ見つけれない。そう思いながら探し続けていた。

《今は範囲も広く、反応も弱い。ですから今は周辺の地形を調べつつ、ジュエルシードもすぐに見つけようとはせずにフェイトさんが記した範囲の中で反応が強い物だけを絞ることだけにしましょう》  
「ああ。それしかないな」

現地に着いてから現在に至るまでジュエルシードの反応がフェイトが記した範囲より狭まっただけではいるが、まだ足を踏み入れていない場所もある。特定するにはまだ早く、広い。

「…もう昼頃だし、戻るか。次の探索は飯食ってからにしよう」  
《そうですね》

翔一は温泉街のある方に身体を向け、戻っていった。今度は間違ってもさっきのようにどこかにぶつけないように『歩く』ことにした。

「しかし、この中から発動していないジュエルシードを探り当てるのは難しいな」

《そうですね、発見されたジュエルシードはいずれも発動後ですから、発動前のジュエルシードを発見するのは難しいでしょうね》

感知できた反応は弱く、集中しても反応が分からないような物ばかりだった。発動をすればすぐに反応が掴め、場所も特定できるが、2個目と3個目の様に近くにある物体に憑依されるかどうか分からない。

とはいえ、フェイトに手伝ってもらったという選択肢も無かった。自分がこの世界に来る前からジュエルシードを探しているフェイトに手伝わせてはここで休ませるという意味がない、と翔一は考えていた。

《発動前に回収できれば越したことはありませんが、最低でも発動して間もない頃には回収したいですね。何かに憑依されては面倒ですから》

「そうだな」

《今は反応が微弱とはいえ、こうして反応が掴めるという事は近い内に発動するという事でしよう。ある程度場所の特定が出来ればその近くへと行きましょう》

「ああ、分かった。

それにしても、フェイトはあんな遠くからよくジュエルシードの反応が掴めたな。オレ達が掴んだ反応よりずっと弱かったんじゃないか？」

昨日の夕飯後にフェイトが遠見市からここ、海鳴温泉街の近くにジュエルシードがあると言い、そこからだと特定こそは出来なかったがそれでも反応を掴めたこの場にいないフェイトに改めて驚かされた。翔一も魔法が使えるようになってから探索系の魔法を教えてもらい、ジュエルシードの探索をジョグをしながら行ってきた。しかし、フェイトのそれと比べると探索できる範囲も狭く、感度も低い。今、ジュエルシードの反応を掴めるのはその場所の近くにいるからであって、まだ範囲を広げたり、感度も高めたりするのは今の翔一には出来ないことだ。

フェイトの魔法の才能はアルフから聞いた話と翔一自身から見て判断してのことだが、魔法を今まで生きてきて全く触れたことが無い翔一でもそれがよく恵まれていることが分かる。

《フェイトさんの探索魔法は探索範囲が広く、その感度も高い。フェイトさんの資質が高いからこそできるのでしよう。ただ、フェイトさんはそれを何度も使っているようなのでまだ成長段階の少女が何回も使用して良い物ではないと見ます。そういう意味ではフェイトさん達には一、二日休んでもらい、主が探索するのは間違いでは

無いと思います」

「当然だ。フェイトばかりにやらせられないよ」

フェイトと共に生活し、ジュエルシードの探索の手伝いをしながら翔一は無理をしてまでジュエルシードを探すフェイトの姿を見て、今回はジュエルシードがある場所の近くに温泉があるということなので休養としてはこの上ない場所だった。フェイトを休ませたい翔一にとっては好都合だった。

「…あの日も結構夜遅かったな」

翔一はフェイト達と初めて会った時の事を思い出していた。ジュエルシードを持っていたことでフェイトが翔一は魔導師と勘違いし、襲撃した日の夜を。その時の事についてフェイトは謝っており、翔一もきちんと謝ったという事でそれを許し、ジュエルシードを渡した。それから今に至るが、未だに翔一がいた世界に戻るはつきりとした手がかりは無い。ただ、発端となったジュエルシードを集める事が、翔一が自分の世界に戻る手段だろうと自身は信じていた。それと同時に、ずっと前から疑問に思っていたこともある事も確かだった。

「…スパイダー、ちょっといいか？」

《何でしょうか？》

「フェイトにジュエルシードを探すように頼まれた人ってどんな人だと思う？」

《どんな人、ですか？》

「前から気になっていたんだ。フェイトに、ジュエルシードを探すように頼んだ人ってどういう人かなってな。お前も気にはならないか？」

《ふむ、そうですね…。フェイトさんには使い魔のアルフを生成

できるほどの魔力と魔法の才能があるのは分かります。しかし私はそれを果たそうとする責任感と使命感がある方に着目します」

「そうなのか？」

《どれだけの才能があろうとも、フェイトさんの芯の強さはあの年頃の少女には持ち得ないものです。フェイトさんにジュエルシードの探索を任せたのはそれを見込んだからでしょう。

ですが、アルフがいるとはいえまだ幼い少女に一人、ジュエルシードのような危険物を集めさせて、その理由も本人には話していないわけですから…私はあまり良い印象は持っていませんね》

「そうか…」

どんな人物がどういう意図を以って、フェイトに対してジュエルシードを探すように命じたのかは知らない。ただ、翔一よりも年下の少女にこのような過酷な事をさせる大人がフェイトの身近にいることが翔一にとっても良い気分ではなかった。

「やっぱりお前もそう思っていたんだな」

《主ですか》

「けど、フェイトに関してだけはお前とはちょっと違うかな」

《ふむ》

「あの子は大丈夫と言っているけど、本当にフェイトは強いかな？」

《と、言いますと？》

「オレがああの二人の家に居候するまで、どういう気持ちでいたんだろうな、って最近考えるんだ。フェイトの親は今いないだろ？何故いないのかは分からないけど、あの子だって本当は甘えたくて、わがママも言いたい年頃だろ。今のオレだって、今の親には多少のわがママは言ったりするのに…。本当は泣きたいくらい、つらい目にあってはいるはずなのにそういうのを見せない。いや、隠しているのかな？」



どっちにしたって親のいない寂しさを抱えている子がどういう気持ちでジュエルシードを集めているのかって考えると…」

自分の胸を掴むように驚つかみするとランニングジャケット風のバリアジャケットがクシャツとなる。フェイトが強いと思うのはスピードスパイダーと同じだった。「泣かない」だけ立派だと思える。しかし、「泣けない」としたらどうなのだろうか？翔一が思っているフェイトの「強い」と思える部分はただ「強がっている」だけではないかと思える。その証拠に数日前にフェイトはこの世界にいる現地の魔導師、高町　なのはと一回だけジュエルシードを巡って交戦した事がある。その後のフェイトの様子を見て、強がっているのが分かった。それを見ているおかげで簡単に「強い」と思えないのだった。

「けど、フェイトにそんなこと言っただって辞めるはずも無いし、辞めさせる権利も無いからな…」。

だったらせめて、あの子が少しでもいいから、樂できるようにオレも頑張らないといけないなと思ったんだ」

《それが、主が今回ジュエルシードの探索を主だけでやらせて欲しいと頼んだ理由ですか？》

「まあな。深夜になつてまでジュエルシードの探索なんてやってたら、見てるこっちが不安になる」

初めの内は下手したら自分よりもすっかりとした子として見ていた。しかし、まだトマトが苦手だったり、たまに躓いてこけたり、難しい漢字を見てはそれが読めなくて、翔一に聞いたりする時もあった。過ごしてきた時間は少ないながらもフェイトのそういった一面も見えてきた。

それを知っているからこそ、どれだけ才能があり、しっかりしていようが、翔一にとってフェイトはまだ9歳の女の子なのだ。

《優しいですね、主は。いくら相手が主よりも年下の少女とはいえ、ご自分を襲った人にそこまで優しく出来る人はそうはいませんよ?》

「そう思ったただけだよ」

スピードスパイダーとの会話に夢中になっているとようやく民家のある開けた場所に着き、そこから旅館へと向かう。その途中で念話を使い、フェイトに連絡を取ろうとする。

「（フェイト、聞こえるか?）」

「（どうしたの?）」

翔一からの念話をフェイトが拾った。

「（今から部屋に戻る。悪いけど、どこかにいるなら戻ってきてくれないかな?）」

「（大丈夫だよ。今部屋にいるから）」

「（そうなのか?　じゃあ、今から行くよ）」

念話を切り、翔一はすぐに旅館の方へと向かい走り出す。旅館にたどり着くと法被を着た男性従業員と着物を着た妙齡の女性従業員が翔一を迎える。その足で部屋へと向かいドアをノックする。ドアの向こうから「はい」という声がし、ドアが開くとフェイトが出て迎えてくれた。

「お帰り、翔一」

「フェイト、アルフと一緒にじゃなかったのか?」

部屋に戻ると同時にバリアジャケットを解除し、旅館の玄関で脱

いで、手に持っていたスピードスパイダーをスポーツバッグの横に置こうとするが、シューズに付いた土に気づき、そこから土が落ちていたことにも気づく。部屋の扉の近くにあったホウキとちりとりを持って掃除を始めた。

「うん。わたしはここで翔一が帰ってくるのを待ってたから」

「オレを？ 別にアルフと一緒にいたって良かったのに」

「でも、何があるか分からないから……」

そんなフェイトを見て翔一はどうしようかと悩む。元々ジュエルシードの探索がこの地に来た本来の目的ではあるが、翔一が今回のジュエルシードの探索を一任しているのでフェイトは手持ちぶさたのような状態だ。それに加え、フェイトにはこの海鳴温泉にある物全てがあまり馴染みが無く（異世界から来たから当然と言えば当然だが）、自身の大人しい性格故、自ら積極的に行くという事が出来なかった。

「……じゃあ、飯食ったらオレと一緒にどこか見て回るか」

「えっ？でも、翔一はいいの？」

「いいの。町の中にもジュエルシードがあるかどうか見なきゃいけないんだから。ただ町の中歩いたってつまらないよ」

スピードスパイダーに付いた土と畳に落ちた土をゴミ箱に入れて「掃除完了」と言い、スピードスパイダーからチップ状のデバイスコアを取り出し、ポケットに入れた。

「スパイダー、一応探索は続けてくれ」

《ええ、分かりました》

「よし、行くか」

「うん」

二人は外に出かけたアルフと合流するためにと玄関まで下り、近くにいた従業員が翔一達に頭を下げ、翔一も軽く会釈をする。

玄関を出た二人は一緒になってアルフがいると思わしき場所まで向かった。念話でフェイトがアルフに連絡したため、場所も分かっているところへと向かった。

「翔一、ジュエルシードの方はどう？」

「少しは絞り込めたかな。もっとも、フェイトが先に場所を示してくれたおかげで探しやすいよ、ありがとう」

「えっ？う、うん…」

翔一に礼を言われると頬を赤くしてしまい、翔一が「どうした？」とツツコまれたが「な、なんでもないよ！」と全力で否定した。フェイトのその答えに頭を傾げつつも、そうなのだろうと判断した。

「まだハッキリとした場所までは分からないからな。自分のペースで探すよ」

「あまり無理しちゃダメだからね」

「おうさ」

温泉街というだけあって、他の温泉旅館、土産屋が多く立ち並び中には地元の個人経営の食料品店やコインランドリーも二人が歩く通りに連ねていた。フェイトはこのような場所は訪れた事が無いので辺りを見回していた。

「フェイトー、よそ見しているとあぶねーぞ」

「えっ？…あ」

いつの間にか、二人の距離が少し離れてしまい、それに気づいた

フェイトが小走りで翔一の元へと向かう。翔一も向かってくるフェイトに歩み寄る。「ご、ごめんね…」とフェイトは謝るが、それを気にしていないと首を横に振る。

「やたらとキョロキョロしてたからな。 やっぱり珍しいのか？」

「うん、わたしの住んでいた所には無いものばかりだったから」

「そっか。でも、人にぶつかったり、車にでもはねられたら大変だから気を付けろよ」

「う、うん」とフェイトは頷き、二人はまた歩き出した。今度はフェイトが間違って車道のほうに出ないように車道の側に翔一が歩いた。そのままの状態でいると、土産屋か何かの店の前にいる赤く長い髪をし、二人が見知った女性がいた。

「おっ、いたいた。 おーい、アルフ」

店の外にいたアルフも二人に気付き、手を振る。

「翔一、ジュエルシードは？」

「さっきフェイトにも言ったけど、少しは絞り込めたよ。で、今は昼飯の時間になったからこれからメシを食いに行くわけだ」

「もうそんな時間？ 全く気づかなかったよ」

そんな中、フェイトはアルフの前に置いてあるベンチの上に置かれている多数の物に気づく。

「アルフ…それ何？」

「ああ、これ？ アタシが飲んだ牛乳だけど？」

「はあ？ お前こんなに飲んだの？」

「念話を受け取ってからただ待つのも退屈だったから、この店で牛

乳を飲んでたんだけど結構おいしかったからついね」

それを聞いて苦笑いしてしまう翔一とフェイト。空になった牛乳瓶を数えるのが面倒なくらいの数だった。

「お前들だけ牛乳飲んでるんだよ…」

翔一も牛乳は飲む方だが、今のアルフのようにここまで飲むようなことはしない。

小学生の頃、ビールを大ジョッキで何杯も飲む父の真似をして風呂上がりには牛乳をジョッキから溢れる直前まで入れて何杯も飲んだことがあり、それが原因で腹を壊した事がある。母からは牛乳の飲み過ぎと言われ叱られた事を思い出していた。その時の翔一が飲んだ量よりも多く、何本も飲んだアルフを見て、腹痛になるな、と心の中で思っていた。言ったところでアルフが飲み過ぎによる腹痛が無くなるわけではない。

（せめて、正露丸は渡しておくか）

と、翔一は思うのであった。

「とりあえず、瓶を片づけようか。アルフ、ここで打ち止めな」

アルフは「分かったよ」と言い、手に持っている牛乳を飲み干し、空になっていた牛乳瓶を翔一と一緒にカゴの中に入れはじめた。

「あらまあ、エライこと飲んだわねえ」

翔一達が瓶をカゴに入れていると見た目が60半ばと見てとれる女性が店の奥から現れた。おそらくはこの店の主だろうと翔一は

思う。

「すみません、こんなに飲んでしまつて」

「いいよ、お金はちゃんと貰っているからね」

満面な笑みで答える女主人を見て、翔一も釣られて笑顔になる。気の良さそうな人でよかったと翔一は胸をなでおろした。

「ところで、今日はどちらへおいでですか？」

「遠見から来ました」

「遠見？割と近いんだね。それで、この子達は？」

「この二人は僕の従兄妹です。今日は久しぶりに会つたんで、ちょっとした旅行でここに来たんです」

「へえー、そうなのかい。・・・ん？」

目を細め、女主人はフェイトのそばに行き、目線をフェイトに合わせるよう前にかがむ。フェイトは「え、えつと…」となぜ自分の前に来たのか分からず、戸惑っていた。

「あらまあ、ずいぶん可愛らしい子じゃないか」

「えっ？」

まるで孫娘でも可愛がるかのような感じでフェイトを見、優しくフェイトの長い金色の髪に触れる。髪を撫でられたフェイトは頬をほんのりと赤くして、何も言えなかった。更に、

「うん、この子は将来美人になるよ。間違いなく」

美人になると言われ、フェイトは耳まで真っ赤にしてしまう。フェイトの顔は今にも火を噴きそうになるくらいに真っ赤になっていた。

（ありやまあ、恥ずかしがっちゃって）

さすがにこのまま放っておくのはあんまりだと感じた翔一は店を出ようと二人に告げ、「それじゃあ」と女主人に別れを告げようとしたとき、「ちょっと待って」と言われ、店の売り物であろう饅頭を3人に差し出した。

「これはウチで作った温泉饅頭だよ。良かったら三つ、持ってってくれないかい」

「いいんですか？牛乳を飲みつくした上に饅頭まで……。　　ありがとうございます。　　それじゃあ」

翔一は一礼し、フェイトも恥ずかしがって無言ではあるが頭を下げ、アルフも「じゃーね」と手を振りながら店を後にした。

「そっぴやアルフ、オレ達が来るまでに何か見たり、温泉でも入ったりしたか？」

「ああ、まだ一つだけだけど温泉に入ったよ」

「そっか。で、どうだった？」

「アンタの言うとおりだったよ！あんなにでかい風呂、見たこと無いよ！思う存分に泳げると言うか……。」

「そっか、それは良かった。でも、温泉で泳ぐなんて事はやめておいたほうが良いぞ？他の人に迷惑になるから」

アルフの反応を見て、思う存分楽しんだことが見て取れる。しかし、あまり温泉に入る上でのマナー違反もしていたのを本人の口から聞いた翔一は注意した。とはいえ、そこまで喜んだと思うと翔一も顔が綻ぶ。フェイトもそんなアルフを見て微笑む。



「とりあえず、この饅頭をいただくとするか」

二人も頷き、饅頭を頬張る。そして、一言。

『美味しい・・・』

その饅頭は三人の口に合ったようだ。

昼食を食べ終えて、アルフは引き続き一人で温泉巡りを楽しむと言い、翔一達と別れ、翔一もフェイトと共に散策を兼ねたジュールシードの探索を行い、大通りの中を歩いた。午後になってくると町を歩き交う人も増え始めていた。

「人がさっきより増えてきたね」

「明日になったらもっと増えるかもよ。さっきみたいにキョロキョロしてたら迷子になるから、気を付けろよ」

先ほどと同じように翔一から離れないようにピタツとついて行くフェイト。翔一の言う通り、町の中は休みの前日と言うこともあり、それなりの賑わいを見せていた。温泉以外に展望台や公園、記念館などの施設もあり、海鳴温泉街に来る全ての人を楽しませる物もあった。フェイトにはどれも珍しく、アルフと合流する前の道中でも周りを見回していた。

「じゃあ、ジュールシードの方はお前にしばらく任せるよ」

《分かりました。では、主はフェイトさんとのデートを楽しんで下さい。ちゃんとエスコートをしてあげるのですよ》

「デ、デート…!？」

スピードスパイダーが発したデートという単語に反応し、今にも爆発しそうな勢いで顔を真っ赤にするフェイト。

フェイトは考える。今思えば、今までの自分の周りには女性しかなくて、男性とはあまり関わってこなかった。デートという言葉は知ってはいたが、まさかこんな形で体験するとは思わなかった。それが相手は初めて自分と関わりを見せた年上の男の子と一緒に…！と、言うことでフェイトの頭の中はヒートしている。

「デートって、お前なあ…。オレは別に…って、フェイト？」

「翔一とデート、翔一とデート…」

ヒートアップしてしまっているフェイトは同じ単語をブツブツと繰り返し、翔一の言葉など耳に入っていなかった。

「フェイト…」

「…あつ！ど、どうしたの!？」

「どうしたのって…それはこっちの台詞だ。フェイトがどうしたんだよ。いきなりブツブツ言い出すから」

「だ、だって…スピードスパイダーがデートって…」

「…こいつの言ったことは気にしなくていいぞ。別にオレは」  
《（あーるーじー？）》

何かを言い掛けようとしたとき、スピードスパイダーが念話を使って翔一に話しかけてきた。

「（なんだよ、いきなり変な声で念話を使って…）」

《（今あなたはフェイトさんに何を言おうとしました？）》

「（何って…フェイトがデートって聞いて固くなってるから『別にデートと考えてない』って言おうと…）」

《（主！？その選択肢はギャルゲーならそこでさよならですよ！分かってます！？これがセンチメンタルグラフィティならその場で音信不通になりますよ！？そんなのあるかどうか分かりませんけど！）》  
「（何だよ選択肢って！」

大体、それとこれと何の関係が…）」

《（主、私は何と言いました？ちゃんとフェイトさんをエスコートしてくださいと言いましたね？その数秒後に忘れるどころか、逆噴射ターンをしようとしてどうするんですか！）》

「（ご、ごめん…）」

自分のデバイスに念話で説教されている魔導師などなかなかいないだろう。何故説教されているのか本人は分かっていないが、今のスピードパイダーに反論が出来なかった。

《（…そうと分かったら、手を差し出すなりなんなり、しっかりエスコートなさい。でなきゃ、私は実家に帰らせていただきます！）》

「（お前の実家ってどこだよ？ナイキか？）」

《（いいから早く！）》

「（分かったよ！）」

念話を切られ、小さくため息を吐きながらも再びフェイトを見やる。未だに少しだがもじもじしているフェイトに手を差し出した。

「え…？」

「フェイト、一緒に行こうか」

翔一に手を差し出されたフェイトは「うん…！」と一瞬だけ躊躇したものの、すぐに笑顔になり、翔一の手を取り、歩き出した。

（そんなに喜ぶことか？まっ、フェイトも喜んでるしこれはこれ

でいいか)

理由はどうであれ、フェイトがこうして笑ってくれている事が翔一には一番何よりな事だった。

《ふう…我が主ながら鈍い。ここまで苦勞するとは…。少しは女性の心の機微を感じとって欲しい物だ。

だが…これもまた、良い物が…。

…二人のためにも、探すでしょう…《

## 第十話（後書き）

ハイジ「・・・祭りの後って悲しくなるよね」

翔一「最初はうざいくらいにめちゃくちゃ高かったけど、その反動でだんだんと下がっていくな」

ハイジ「あの可愛い奈々ちゃんの姿をまた生で見れるのは一体いつの日だろうな・・・。はあ、奈々ちゃん・・・」

翔一「・・・念のために聞くけど、ライブどうだった？」

ハイジ「最高に決まってるじゃないか！特に奈々ちゃんが目の前に来て、手が触れあった時なんか！そしてほのかにいい香りがしたww」

翔一「あんたは変態か！前から思っていたけどよ・・・」

ハイジ「違うな、変態じゃない。大変態だ」

翔一「何でこんな人がうちの作者なんだよ・・・」

ハイジ「ははは、諦めろ」

翔一「うるさいわ！」

皆さん、こんな作者ですいません・・・。それでは、また」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5014n/>

---

魔法少女リリカルなのは ～音速の走り人～

2011年10月7日14時51分発行